

特277-769



*76W10708

特277

769

先生の報徳教及報徳社を過去
董品として扱ふ時は過ぎた。
興隆躍進の途上にある日本民族の
聖典として、吾々はこゝに報徳教
を新時代の政治経済道德の示標と
せねばならぬ。

石田傳吉著

報徳思想の發展

— 報徳教及び報徳社の歴史的使命 —

會協村農本日



始



石田傳吉著 (訂正二十九版)

理想之村

四六版 八六二頁
定價 二圓五十錢
送料 二十一錢

東京 市村 外山 地方

著者は數十年順禮の旅を農村改良の爲に捧げ、或ひは演壇に或ひは巷に、家庭に、農村ユートピア建設の爲めに温き臥床を知らなかつた。肺肝を出づる言々句々、それは著者の貴き體驗であり、純なる涙であり求めんとするユートピアに達する唯一の通路である。然してその意氣は將に太陽を射るものである。それは單なる傳道者の言ではなく、來らんとするユートピアを確實に把握した、偉大なる傳道者であり純朴なる創造者である人からのみ言葉である。本書を読むものは、緑の汀に安息所を發見するそれと同じく、本書の汀に始めて安息の棲家を見出すであらう。それが本書が普通の小説と異なる所、村の争ふて求める所以であり、世の宗教家、教育家、社會改良家を以て任ずる人、伴侶として推める所以である。ユートピアを畫くそれは向上の第一歩でならなければならぬ(地方行政評)

報 德 修 養 要 典

石田傳吉著
報 德 修 養 要 典
分 度 經 濟 生 活 更 新 原 理 鑑
致 富 借 金 整 理 の 仕 方

三六版 定價 三十錢
一箱 組入 定價 八十錢
無語ツキ 定價 二十錢
袋 入 定價 二十錢
四六版 定價 二十錢
六十四頁 送料 錢

76W10708



東京 替 東 京 一 六 四 四 番

序

二宮先生の報徳教は、直ちに日本教の代名詞なりと云へる。夫は先生自から體驗し後世へ遺されたるものは、神ながらの道に叶ふ實踐と教訓であるからである。斯く先生の教を信する吾等は、常に斯教を信奉し、又實踐につとめ、更に斯教の普及と斯教を基調とする農村革新經營を四方に宣傳する者である。本書微々たる短篇ではあるが、斯教の有つ使命の深く高く且つ廣大なるを想ふて、これが解説普及の上に大いに新生面を開拓して、尙これが一層の忠なるを誓はんとするものである。而し或は、一部の人々によれば斯くの如き時代化を叫ぶことは危激なる異端者の言なりとして、直ちに忌諱される者のあることを豫期せぬでも無い。而し夫は盲者の象を探くる譬論にも等しい者として一笑に附してもよいと思ふ。謂んや先生は、既に釋迦の佛教でも、又、孔子の儒教でも、或はその他の教説でも是々非々と忌憚なく批判し且つ其良を採り、更に劍鑑發明する處があつた。茲に報徳教をして一層國家社會の進運に貢獻せんがために、教祖二宮先生の立教垂示の大精神を深く模りて、常に研究し、解説し、又理想するものを経めて一書とした。此度目出度くも迎へる先生八十年祭記念にあたりて之を上梓して、先生の靈前に供へ奉り、併せて四方有志の閱讀を乞はんとするものである。



吾等の提唱する斯教の時代化として、本書の内容に收むるものがその一人たりとも賛同さるる知己を得たならば、畏らく先生の英靈も亦嘉納あり給はりしものとしての素因があること知つた吾等は、**ヲ**を即ち神ながらの道の姿であるを思ひ、眞新の國民道であると信ずる。報徳道は又新進國民指導の原理として、時代化の要あることを思ひ、茲に日頃研究撿覈する處を偏んで、此絶好の機會に於いて發表するものである。幸ひにも四方各位の御高讀に叶ひ、又何分の御批判なり或は賛同の辭を給はれば光榮これに過ぎない。讀者を之諒せよ。

二宮先生八十年祭記念日

著 者 識

目 次

第一章	凡ゆる改善革新の指導原理はこれだ……………	(一)
第二章	史實に明徹なる産みの苦惱を忘るな……………	(三)
第三章	國家的大飛躍の前の大飽食……………	(五)
第四章	夜明け前の大施風乎……………	(九)
第五章	森羅萬象を靜觀して天地の聲を聽け……………	(一〇)
第六章	貝原益軒の謬説を引て世人の迷妄を正す……………	(一四)
第七章	共存共榮向上の基調即報徳道……………	(一六)
第八章	既成宗教の偏見を匡す報徳道……………	(一八)
第九章	報徳教の本質は何乎……………	(三三)
第十章	報徳教の新生命とは何乎……………	(三三)
第十一章	報徳教の新八大徳目―至誠と尊法……………	(三七)
第十二章	報徳教の新八大徳目―勤勞と自治……………	(三九)
○	人生六十年中勤勞時間……………	(三〇)
第十三章	報徳教の新八大徳目―分度經濟と神の神様……………	(三三)

第十四章	報徳教の新八大徳目―助成と共同	(三九)
第十五章	報徳教の新八大徳目―推譲	(四三)
○	報徳狂の家出	(四八)
第十六章	報徳教にも又大乗道と小乗道がある	(四九)
第十七章	二宮主義の生命は協同經濟機構にある	(五三)
第十八章	報徳社と産業組合の將來を豫斷する	(五五)
第十九章	農村不安を救ふのは報徳教及報徳社の時代化にある	(六四)

報徳精神の發展

石田 傳吉 著

第一章 凡ゆる改善革新の指導原理はこれだ

我が二宮先生の主張、創始、實踐されたる報徳教にして死物ならば止む。苟くも生ける時代の産物であるならば、その實體は世と共に世々に生氣を傳へて、時と共に進化して、又人と共に發達して行かねばならぬ。

謂んや、昨今は國家的國民的大飛躍の前の非常時である。何か強い指導原理がなければならぬ時であるからである。之を意識するとせざるとに論なく國を擧げて今、精神的覺醒期に入つてゐることは、近時澎湃たる日本精神研究の旺なることにみても、明らかである。此劃期的覺醒期にあたりて、皇國道實踐の巨人二宮尊徳先生の遺教たる報徳教が、時代の要求に應じて新日本精神建築の基調として、又凡ゆる改善革新の指導原理として最も力ある教であることは否まんとしても否定することの出来ない尊さと、大きさと、實質がある。之を單刀直入卒直に

説明すれば、二宮先生の遺教報徳教は純然たる日本精神の顯現であつて、畏くも、皇祖皇宗の靈命聖勅の結晶されたものと言へるからである。夫が天明の昔、教祖二宮尊徳先生によつて靈感體驗されて以降、殆んど一百五十年間に亘りて、教理と仕法は假りに地方的ながらも、各地に實施されて、國家社會に貢獻するものは頗る甚大である。而し時代は急轉直下した。されば過去に於て優良なりとするも、又時代化と言ふことも考へてみなければならぬ。故に吾人は其業績に鑑みて、更に進んでこれが時代化と普遍化を圖るの急務なるを思ひ、又もつて之を新興國民道の典型たらしめよと絶叫するものである。

教祖二宮先生が、多くの宗教や學說の偏見因習等に因はれないで、我に報徳の道のある事を發見して、實踐窮行されたことは、非常なる卓見であることは謂ふまでもないが、その先生の發見されたものは、實は我が神ながらの道であつたのである。皇國に生を得て、皇國道を尋ねて、容易にその正道に入り兼ねるものゝ多いとき、吾等凡人の努力の及ばざることゝは言ひ條、先生は若くして其道に悟入されたことは、如何に多幸多福なる先生の生涯であつたかを仰望して止まない、吾等は日夜、先生の教訓垂示の蘊奥のある處を味讀三昧して、今は幸ひにも先生の報徳の教を通じて、眞の皇國道に到着し得たことを感喜するものである。由來、報徳教とは日本教の代名詞であると理解し靈感する吾等は、二宮先生によつて垂示教諭された

る教旨の形骸に襲着しないで、その大精神のある處を探り學び且つ遵守して、實踐上の時代化を圖ることの要務なるを想はずにわられない。謂んや眼前に見る報徳教及び報徳社の實狀がともすれば時代の進運に遠ざかりつゝあるかの如きものと見聞するものがあるからである。然も今は、國家的大飛躍の前の極めて多難多艱なる場合でもあつて、國民の多數が思想的に岐路に立ち迷ひ、又生活上規範と方向を失つてゐるとき、直ちに國民に呼かけて、その蒙を啓き又生活の方向規範を教示するものは、眞にその力を有つものは、唯一の皇國道の實踐教たる報徳教にあることを信ずる吾等は、今の非常時に處する打開の鍵として協力經濟の機構を擁して立つ二宮教の活躍に希待するものが大きいからである。

第二章 史實にみる産みの苦惱を忘るな

神ならの道の實踐は報徳道なりと斷ずる吾等は、近時極めて思想の險惡甚だ隠かならざるあるをみて、或は識者とも言はるゝ側の人々が、平素の沈着振りにも似ないで、昨今只管周章狼狽するの態をなして、却つて自他を過らんとする如き淺見愚慮の憂を思はずものがある。それは取りも直さず、我家のために最も目出度も愛孫が與へらるゝ場合にのみみる現象そのまゝに等しいものがあるからである。即ち産れる刹那の産みの苦惱であつて、其時産婦が訴へる陣痛

の惱みは、トテも傍の者が見てゐるに堪へない程、産婦は將さに必死の苦をするのである。其の産みの苦難があつて始めて玉の様な愛兒は授かるのである。然るに自から出産の經驗を有たない石女石男が、その時にあたり周章狼狽するに等しいのが謂ゆる識者なりとする人々の昨今ではあるまいか。吾人は此場合敢て悲觀するものではない。寧ろ樂觀するものである。されば之を史實について鑑みるがよい、神話に遺る天の岩戸に天照大御神のお隠れなさる時の素盞鳴尊の處作は兎も角として、有史以來日本の歴史に記されたる、我國家の興隆興起した直後に現はれた忠實を考察するとも發見するものは、外來文化と、その文化の齎らすものに附隨して起つた不祥事變の伴なつてゐる事は見逃すことは出来ない。又最大細心の注意の要なることは言ふまでもない。けれども謂ゆる牛を矯めて牛肉殺すやうな愚さがあつてはならぬ。

更にそれを想ふにつけても寒心して止まないものは、幾多の不祥事を誘引し蘊釀したる外來宗教や生硬なる學說の鵜呑みである。この時その由來する處を研究して發見するものは、我が大和民族發生の根本をなす處の、古神道の研究と普遍化が今尙甚だなほざりにされてゐることにある。ために現代大和民族の思想が混亂又複雑を極めてゐて、眞摯なる青年學徒にして、尙岐路に立ち或は邪道に陥るものゝあることは、既に識者の發見してゐる處であつて、今更ら吾等の贅言を拒む必要も無いことゝは思ふ。然るにたゞ爰に遺憾とすることは、凡ゆる國民の思想

なり、生活を指導し支援する強い力ある國教のあるか無きかの貧弱さである。凡そ世界に國をなして、今現に文化を有ち、富強なる國家社會を成す一流の國家であつて、我が日本の如き多宗多神の國家があるであらうか。もし現時の思想界に不安なる暗流がありとし、或は又國民の精神生活に何等か缺陷があるものとすれば、その原因は確かに此處にあるものと思ふ。この時その缺陷を補ふて餘りあるものは、二宮尊徳先生によつて表現され實踐されたる報徳の道こそその任にあたる使命をもつて創始されたる國民教なりと信ずるものである。

斯うした吾等の持論は、昨九年三月發刊したる、吾等の新著『農村問題解決の神髓』中の第二編に於て、聊か論述してをいた、殊にその第六節より八節に於ては、全國教化團體の各位に希望する極めて大いなる希望と、又大膽なる注文とが無遠慮に記述してある是非参照してもらいたい。

第三章 國家的大飛躍の前の大飽食

神ながらの道に立つ大日本帝國は、過去に於ては儒教、佛教、將又キリスト教等の渡來或は又浸入によつて、或る場合には、神ながらの道は曇り汚されんとするが如き急なる場合も無いではなかつたが、忽ちそれは本然の神ながらの道の復活によりて、覆滅消光の危難を自から脱

出してゐて、却つて反擊的に彼の有する長所を執つて我有として短を養ひ、神ながらの道は益々強大明光を加へて來て、我が日本の國家社會はそうした史實の中に躍進又躍進して發展して來てゐると思ふ。

更に之を略述してみると、欽明天皇の朝、渡來した佛教の齋らしたる文化に心酔した、大臣蘇我入鹿の一族があつて、一時は國家を過らんかの如き場合もある。その時入鹿のはびこつた勢力を打倒して、成されたるは、大化の革新にみる顯著なる事實である。當時に於ける仲大兄皇子様や藤原鎌足を中心とした愛國の至誠と勇奮活躍の前後を思ふとき吾等國民の五體は或時は粟を生じ、或時は又熱血は躍動するものを覺へる。

妄化の革新後又年を経ること百二十年目にして起つた妖僧道鏡の不逞の始末も又拜佛醉心迷大の結果ではあるまいか。天祐にもそのとき和氣清麿の受けた神勅によつて神ながらの道はこゝにも又光輝はかゞやいてゐる。

越て又、百三十五年後の寛永年間には儒教の齋らした文化に心酔して、その惡影響に中毒したる藤原氏の一族及び藤原氏の勢力に仰合したる諸族が、唐の文化に心酔して國家の威信を壞けるが如き片務的の遺唐使を中止せしめたる達人は誰れであつたらうか。國學の宗家にして尊皇の權化とも云ふべき菅原道真公であるのである。菅公の筑紫に左遷の危難に遭はれたのは藤

原氏を中心とする儒教心酔の徒の陥策にあつたのでは無いか。菅公を犠牲にしたことによつて儒教文化の弊毒より國家は救はれたのである。噫。

明治維新の斷行さるゝ一百三十年前に、奉公心得書を懐にして雪の越後の國から京に登つた武内式部は國學者である。甲州の國學者山縣大貳、越中の生んだ藤井左門等と握手して尊王倒幕の大義を唱へて勤皇の魁をした最初の犠牲であることを知る人々は覺めたる國學者山崎暗齋又は本居宣長、平田篤胤大人の名を知る人々は、果して中井竹山の舍弟、中井履軒の憂國の文學の溢れてゐる成年録が、如何に尊皇倒幕の志士の精神的糧となつてゐることを知るであらうか、吾等は青年時代陸軍教授であり、又帝大の教授であつた内藤七叟先生の編輯になる博文館發刊の少年叢書を破讀する中その第一巻中に、前記抑佛專信論のあるのを知つた。吾等の宗教研究眼は實に中井履軒先生の高著によつて活躍開始されてゐるのである。その全文は拙著『盲目村長と全土村の自治』第十六章に載せてある、二十七頁に互るその文の内容は特に時務を識る青年に一度は眼を通すことを奨めたい。

吾等は十五歳のとき頼氏の日本外史を恩師小林廉作先生に習ひ、その時楠氏、北條氏、足利氏の卷にいたつて暴逆北條足利等の罪惡を悲憤した以上に少年叢書中の抑佛專信論を讀んで慷慨したことを、老後の今日尙追想し尙新たなるものがある。かゝる高著の存在をさへ教らない

である、今の日本の青年教育の貧弱さを憂へるものは農村改造のユートヒヤ著す者として特に一言附記するものである。

尙更に又最近續出してゐる思想的國難の由來する處を調べてみると概して歐米キリスト教國文化に心酔したるものが根禍となつて脱線してゐるものゝ多い様にもある。又、彼の四十二年事件の逆徒中には、函根大平の佛寺の住職内山愚童等の混つてゐたことを見逃してはならない二宮先生の報德思想を研究しつゝ前記する史實に遺る外來宗教文化の由來と始末と思想關係を研究するとき、二宮先生の教訓歌の意味が一層明らかになり、又憂國の大文字とも味へる。

○故道に積る木の葉をかき分けて

天照神の足跡を見む

○思へたゞ唐學びする人とて

我が身を惠む此の日の本を

著者註、故道とは我が神ながらの道を云ふのである。木葉とは幾多の宗派學說の類とし知るがよい。唐學びとは儒教の文化と云ふたものだ。

而し又史實に遺るものを調べて面白く、又痛快に思ふことは、我が日本が何時も大飛躍大發展の活躍をなさんとする前には必らず何時でも、思想的飲食をやつてゐることである。そし

て日本精神は彼の長をとり、我が短を改むることによつてはち切れるやうに營養されたものが更に新しい時代を生んで國家國民の幸福を齎らしてゐる有様であるのである。そしてその間に於て、消化力の弱い胃腸病患者も隨分輩出して、謂ゆる思想的傳染病で死んでゐるものがある。かゝる病者が出る場合國家社會はその前後に於て防衛と豫防のために大きい損害をする。その際杖を喰つて甚だ迷惑するものが先覺者であるのである。彼の渡邊華山や高野長英などは近世に於ける先覺者としてその中でも有名なものだ、更に又華山の恩師にあたる佐藤信淵先生の如きも經世の大著、宇内混同秘策によつて小膽無經綸な幕吏等のために、彼は間もなく臭ひ彼はキリシタンパレン徒ではあるまいか、或は由井正雪一流のむ反の徒であるかの様に見られたものだ、信淵先生は幸ひ天壽は全ふされたが、江戸十里四方追放申付られて多くの上總東金町大豆谷又は埼玉間土谷村鹿中袋に隠棲されてゐた。信淵先生が國家の海外への大飛躍策を書いた經綸策『宇内混同秘策』の雄編は、實に文政五年彼が五十五歳のとき上總大豆谷の隠棲地で筆を執られたものである。

第四章 夜明け前の大施風

此處最近十年間に、殺傷事件の事象は大小善惡の場面は種々の變化はあるとしても、謂はゞ

夜明け前の嵐であつて、これは何うしても免るゝことの出来ない胎風の通過であつたのである。最近起つてゐる國體明徴、或は選舉肅正淨化の運動と云ふ奴は、その胎風の最後の余波の齎らした晴天になる一寸前の淨化作用であつて、國民が悉く眼醒めて立たんとした日本精神勃興であるのである。又その研究に附隨して起るものは修正であり補足であり、又古い者の再吟味であり掘出しであり、更に又新発見でもあるのである。近頃新聞紙の二面を賑はしてゐる國體明徴事件の如きは修正にあたるのであらう。修正される博士や大官達にはまことに氣の毒で同情に堪えないものがあるけれども、國家のためには止むを得ない犠牲であらう。國家的大飛躍のために忍んで貰はねばならない場合なのである。然もその修正を必要とする要點が十年も二十年も三十年も或はそれ以上に遡つてなさねばならぬものであるとすると、これまでの長い間それを盲してをいた者も同罪であるから、そうなると共に取調べは既に地獄か極樂か天國まで檢事や判事の出張を要することになる。遂に人間業では出来ないことになる。又未だ生きてゐる國民全體にも全々責任が無いとは言へない。さればこうした問題は國民的にその必要を自覺したることによつて一段落の着くことが國家社會の力を強力増大なる所以ではあるまいか。吾等報徳教の信條はかくの如きものである。

第五章 森羅万象を靜觀して天地の聲を聞け

我が國は神國である。我が國は神ながらの道の上に立つ國體である。國家であるのである。故に我等は神國の眞民であつて、人民であるのである。祖先以來神社を祀りて、神棚の下にて生れた國民である。又神社に奉仕怠らないものなりと言ひ、又我は神職の任にありて、日夜神社に奉仕するものであると云ふ人々が、更に又、神社神宮を教育し又は神社を護り神域を監督する役目を持つものなりとする人々にして、眞に神道の眞精神を能く實踐すること二宮先生の如く實踐して其職責を果してゐる人は、果して幾人あるであらうか、或は又かゝる信念も無くたゞ單に傳統的に又は盲目的に信念し信仰を有つが如きであつてはならぬ。過去に於ても又今、眼前に於ても、神ながらの道を信ずるとする人々が、ともすれば佛敎に押され或は又キリスト敎に迎合し或は彼等に一目を置くが如き甚だ卑庸なる傾向のいちじるしいことは、果して何が故なるか、斯くも自から卑下するものは、畢竟自分の信ずる神ながらの成立する本源を明らかにすることに努めないで、睡生夢死的の生活を繰返して少しも恥としない。謂んや神ながらの道が一米人の研究によつて明らかになる態をみて、別に奮起し勉強する態も無いやうである謂んや、神ながらの道の實踐的典型とも云ふべき二宮尊徳先生のあることさへも等閑に付し

わたのである。然も彼等佛教にしろキリスト教にしろ、假令氷炭相容れないものがありましても、一通りはその立場立場より曲りなりにも筋道の立つた教理を選んでゐるから、その點に於ては他の信仰から押されないとする信念に燃へてゐるのである。かるが故に彼等の信仰心は他宗を壓迫して止まないまでに強よい信念に燃へたぎつてゐるのである。

然るに神ながらの道を奉ずる人には、今尙その信念を強よく燃へ立たすに足る深い研究が無いから力強く燃ゆる信念が與へられてゐない。その信念の起るべき研究心が燃へてゐないのはその本源たる神ながらの道を理解するまでの教養が與へられないからである、幸ひそれあるとするも、それは萬人が理解されるまでに大衆化されてゐないからである。そして尙他の宗教の成立する本源と對立して、自から強よくあるを知るに足る特異點のあることをハッキリと教へられてないから理智的にも感情的にも強よい主張、信念、信仰心が燃へ出る筈が無い。古神道の振はぬ所以はそこにある。二宮先生は既に天保のむかし我が神道流の怠慢と迂濶を指摘して強よく批判してをられる、二宮翁夜話第六十三章を披げると、神道とはかくの如きものではないとして、別に報徳の名をもつて眞の神ながらの道は、斯くあるべきものであつて又斯く實踐すべきものであるとして、教を説いてゐられる。これあることは、二宮先生の卓見であつてそれが又報徳教の力ある處であるのである。即ち宇宙の法則に鑑み、森羅萬象を靜察し天地の

聲を聞いてをられる、二宮先生の教歌に曰く。

○音もなく香も無く常に、天地は書かざる經を繰り返しつゝ

○天地と皇と親との恵みにて、世を安くふる徳に報いよ。

天地の恵の豊かな感謝しなくてはならぬ。感謝する丈けでは尙足らぬ。恩に報ひる義務がある、これが分れば實踐されねばならぬ。これを行ふには又二つの道のあることを知らねばならぬ、爰に於てか天道と人道の區別をつけて教へてゐられる。天道を説いてゐる人は古來幾人もあるが、人道を説いた人は恐らく、二宮先生のみであらう。二宮先生の偉大さは此處にある。報徳教が神ながらの道の實踐でありとして、直ちに國教たらしめよと吾人が叫ぶのも亦此處にあるのである。

或人は、二宮先生の教旨は、丸で儒教の講釋を聞くやうだと、感違ひしてゐる人がある。一寸迂つかり聞いてゐると尙そうしたやうに思へる節が無いが、一寸注意して研究すると、又夜話などを讀んでも大きい開きのあることがよく分る。報徳教は古來宗教的のものでもなければ、尙更ら學說でもない。神ながらの道の解説であり、又實踐の方則でもあると云へる。

茲に一寸附記してをくが、二宮教の先達である人々が、又大きい間違ひをしてゐる。假令ば報徳教なるものは理論では無くて實行であるなぞと力んで、先生の獨特の哲學のうん奥を極

めないで、報徳教の特異點を闡明することゝ又、經濟的には協力經濟とも名稱してよい、優れたる機構の立て方を示してゐられる事を知る賢明さを缺いてゐて舊態以前たる封建時代そのまゝの消極生活のみを千變一律に説いてゐるやうな醜態を暴らしてゐるが故に、報徳教が四方八方識者の非難を受け又普及されないものである。曾て吾等は天理教や金光教の教理を書いたものを見て、なぜこうした底級なものが燎原の火のやうに廣がつて、報徳教が世人に注意されないかを深く怪しんだことがある。

第六章 貝原益軒の謬説を匡して世人の迷妄を解く

二宮先生の報徳教が儒教的だと云ふ見方を訂すために、儒教と似てゐるやうで其の違ひあることを、先生が自から弟子達に嚙んで含むやうに教へてをられる。即ち貝原益軒は「儒教ではそのまゝ人は天地の子なり。天地を法として行ふべし、天地には別に心なし、萬物を憐むを以て心とせり。別に業なし。萬物を生み出し養ふを以て業とせり。人も亦此心を受けて常に人を恵み憐むを以て心とすべし」と言ふてゐる。これは古來、概して儒者の説く處であつて敢て珍とするには足らない。吾等はそうした儒者一流の陳腐なる説には賛同することは出来ないと言つて、先生一流の獨創を立て天道と人道を分ち、天道とは天地自然の道であつて、四時運行

して異りがない。然るに人道は聖人先覺の師によつて作りたるもので、元來基本の異なるものである。「草木禽獸は自然の天道によりて生涯す。人道未だ拓けざるときは人も又禽獸と差なし神聖の世に出づるに及んで生を安んずるの道即ち人道起る」ものであると言ひ。又「天に善惡なし、故に稻と稗とを分たず、種あるものは皆生育せしめ、生氣あるものは、皆發生せしむ。人道は天理に従へども、稗を惡とし、米麥を善とし、人身に便利なるを善とし、人淨に不便なるを惡とす」と明瞭に天道と人道とを分ち教へてをられることを知るときは、儒教に似てゐると云ふ考へ方なり、又見方、聞方は大變なる間違ひであつて、爰に於てか、報徳教の特異點がよく判明するであらう。

更に又痛快なりと思ふことは、佛教の未來觀を駁して釋迦は「此の世は假の宿なり、來世こそ大切なれと云ふといへども、現在君あり、親あり、妻子あるを如何にせん、從ひに出家遁世しても、君親を捨て、妻子を捨つても、此身あるを如何せん、身體あれば食と着物と二つがなければ凌がれず、船員が無ければ海も川も渡れぬ世の中なり、故に西行法師の歌に「捨て果て身は無き者と思へども、靈の降る日は寒むくこそあれ」と云へり。又儒道にては、禮に非らざれば視ることなかれ、聽くこと忽れ言ふことなかれ、動くこと忽れと教ふれども、通常汝等の上にては、夫にては間に合す、故に子は「我がためになるか、人のためになるかに非ざれば、

視ることもなかれ、聴くこともなかれ、言ふこともなかれ、動くこともなかれ」と教ゆるなり。我がために人のためにもならざる事は、假令經書にあるとも經文に書いてあつても、予は取らず故に予が言ふ處は、神道にも佛道にも違ふことあるべし、是は予の説の違ふにあらざるなり、能々玩味すべし」と二宮先生の威力ある強い自身と信念をもつて、古人の教説と對比して、或は検討しつゝ自説を明瞭簡潔に教示されてゐることは、これ又報徳教の特異點であつて、多くの宗教家や學者の考へ方と大いに異なる處であるのである。

第七章 共榮向上の基調即報徳道

古來、唯心的に身を修むる道を説いた人は尠なくない。それは大小指を折るに堪ない程數があるかも知れない。中にも釋迦、キリスト、孔子等はその内でも最も雄なる唯心主義の頭領である。又その人々とは反對に唯物に考へて人類社會の黄金化を主張する人も少なくない。近世ではマルクス、エンゲルス、クロボトキン、ブルトン等があり、尙更に最近米國で提唱されて一部份の間に大變人氣をあつめてゐる、テクノクラシーの主張と運動がある。そのテクノクラシーも吾等の見る處では大きい缺陷を持つもので、社會の理想化等は及びもつかないものとは思ふがこれは未だいはゞ實驗中であつて、マ氏やエ氏ブ氏ク氏あたりの唯物主義の様に實驗濟の落第

生と同一に扱ふことは、一寸扱かうことが早計であるかも知れない。それより先き、天保年間に於て唯心唯物兩面を内容として起りたる二宮先生の報徳なるものが創始されてゐることは世界に向つて氣を吐くべき日本の矜持である。又、報徳教の偉大さは茲にあることを知るがよい過去に於いて役に立つても、役に立たなくなつても、分つても分らなくても、西洋でなければならぬとした西洋崇拜時代は既に過ぎ去つた。今の時代に於て、純日本思想の所産である我が報徳教のあることは吾等大和民族の世界への大きい示唆として感喜してよい。然し、二宮先生以外に萬國を通じて道徳的に經濟的に團結する社會教化を提唱してゐる人が無いでは無いとしても、又その何れの宗祖が説いた教旨なり、又は學説なりは何れも人類社會の福祉を本旨として説いたものに違ひないから、宗派や學説の如何に拘らずそれを眞剣に尊奉することによつて事實に於て、相互扶助の團體的活躍を行つてゐるものが無いとは言へない。むしろ有つてよいと思ふ。けれども夫れは其團體の中心に立つ人の理解と努力と人格によつて成るのであるから他人には眞似ることは出来ないものである。だから、これは例外の事であつて一般に向つて推奨する價値は無い。然るに我が報徳教は教祖二宮先生以來多年に涉りて廣く實踐されてゐるのであるから、唯その時代にはまらないきらいのある處や、又は古い形のある點を訂正修補しさへすれば、あらゆる宗派、あらゆる學説、主義を超越した十全の教であると云ふことが出来

るそして共榮向上の基調は報徳教の外に求めても求め得られないことを知つて、直ちに、本道に突進されんことを提唱して止まない。

第八章 既成宗教の偏見と報徳道

更に尙一應考ふべき事は、釋迦と云ひ、キリストと云ひ、何れも彼等は人間性は唯心唯物靈肉の本體である事を考へてはゐないか。然し彼等は心靈の働きに重きをおくが如き偏見に陥つてゐる。宗教と名のつくからには今も昔も變らない、最も新しい天理大本の教までが皆その唯心的の偏見に因はれてゐることは新舊とも宗教の共通の缺陷である。儒教は宗教の様に唯心的ではない。謂んや未來に憧憬するものでもない。されば宗教では無く、天道を本として説く一種の學説と云つた方が適當であると思ふ。けれども濟世救済を念ずるに唯心的であることは宗教と五十歩百歩の差であるやうである。もし之を疑ふなれば各宗各學説の過去の業績に觀、又現在の有様を考へてみるがよい。而し又、同じ唯心教にもキリスト教を信ずる民族たちの國家は、現在文化の中心をなしてゐて、ともすれば世界を征服せんが如き迫力をもつてゐる。

現に今かつかを交へてゐるイタリとエチオピアがそれである。然るに印度の天竺に發祥したる佛教は全亞細亞の心靈界を支配してゐる宗教ではあるが、之を信ずる民族なり國家は漸く吾

が日本のみが歐米キリスト教國に伍して行くことが出来るが、その他は各國ともに文化は低く國力は甚だ貧弱で振はない。殊に佛教の本國である印度は國家としては、既に滅亡して了つてゐる。斯くの如き差の生じた原因は何處にあるかと言ふに、同じ唯心教でありとするも、キリスト教は反省向上を説いてゐるから、科學が起り教育産業が發達した。それに反して佛教は寂滅以樂の諦めを説く一方で、極めて消極的宗教であるから、それを信仰する國民は無慾でんたん念佛を申して徒らに死の早からんことを祈るやうな状態に陥つて了つた。むしろ佛教は諦め教と云ふよりも超世虚無教と云つた方が當るかも知れない。かくの如き状態であるから佛教を信仰する民族には、現代に強よく生きようとする氣格を自から消失破壊し、近代文化の基礎をなす科學の發達を壓へて了つた。その結果は國力は伸びず貧弱そのまゝであるから、遂に近代文化の旺盛なる國々の壓迫を受けて、何うすることも出来ない有様で、たわいもなく亡國して了つた國もある。印度は人口三億を有する廣い天地ではあるが、それを英國は砲列を敷かず一兵も損せずして占領してゐたのではないか、かくて英國の治下にある印度の人民は今尙殆んど無教育の儘に置かれ奇剣誅求に泣いてゐる。ガンジ一の如き憂國の志士が無いは無いが國民の殆んどが無智であり、無氣力に陥つて了つてゐるから、印度の獨立等は夢想にも思へぬ哀れなる状態であるらしい。此頃筆者が會見したる印度の亡命客は、日本に仰佛專神論を書いた中

井履軒を有つ日本の國風を非常に憧憬し、自分の故國に生れた佛教が故國人を去勢して了つて遂に亡國した状態を慄惟し、唱鳴止まないものがあつた。吾等も遂に慰める言葉が無つた。更に支那は何うかと云ふと、寂滅以樂を説く人起世虚無的な佛教に入つて来る前に於て現實を重んずる儒教が起つてゐたお陰で、相當佛教が行はれても、亡國となることは免れてゐたものゝ今は僅かに生命を持繼してゐる状態であることは、吾等が眼前に見聞する通りである。然し、近代文化の消化に後れてゐる支那にキリスト教的思想の浸入してゐることは、明日の支那は何うなるか頗る疑問である。

貧弱なる佛教國、亞細亞に國家をなす吾が大日本帝國は、神ながらの道によつて立つ國家であることによつて、過去に孔子の儒教を容れても、その儘現實主義には偏しないで國家を成して來た。又佛教を容れても萬事諦めの起世虚無的の徒には墮落しない。更に又キリスト教を容れてもこれを又殆んどその長所のみを消化して、吾が成長の營養としてゐる。貧弱なる亞細亞に國をなして今は世界に雄飛する實力を養ひ、今世界を支配せんとする歐米キリスト教國を向ふに廻して對等の位置に立つものは、謂ふまでも無く我に神ながらの道があるからである。神ながらの道によつて、涵養されたる大和魂があるからである。吾等の崇拜し又理解する二宮先生の報徳道は神ながらの道の代名詞であつて、二宮先生を通じて、表現されたる報徳の教は日

本精神の本源即ち神ながらの道に入る道程であつて、又實踐窮行の活模範であるのである。吾等が提唱する報徳教新八大徳目の涵養は、とりも直さず現代國民の日常訓でなければならぬ。それは畏れ多くも教育勅語の御聖勅に一致する道徳經濟の實踐的内容を有つものである。

第九章 報徳教の本質は何か

世界の交通未だ開けず、歳たまたま凶旱あれば、餓孚忽ち道途に横はり、慘禍累々たるを見たる天明天保の昔と、東西相濟し、彼此相倚つて物資の交換の旺盛なる今日とを、同一律にすることは甚だ無理な見方であることを考へなければならぬ。然るに昭和の今日、尙、二宮先生の報徳教を祖述するものが、唯だ封建治下、未だ産業資本の運用の用が起らず、僅かに狭い領内に限つて行はれたるものを、その精神を執らないで古い形骸のみを金科玉條として墨守しいかにも進歩の跡のない、頑迷因陋の謗りを受くることは、斯道のために誠になげかわしい次第であると歎ぜざるを得ない。

吾等は二宮先生の教訓の精神は萬代不易のものであると尊奉する。けれどもその解説なり仕法は、何時の世でも時代と共に進化するものがなければならぬと思ふ。決して吾等は異説を立て報徳教の普及を阻止せんために言ふのではない。

後文にも少し詳述しておくことながら、忌憚なく言へば、今の町村報徳社の多くはあたら死社に終らんとしてゐる觀が無いでも無い。従つて全國に散在する報徳結社は單なる保守團體の極端なる消極主義實行機關と墮し、或は一種の貯金組合の能しかせぬ事に終るものが無いとは言へぬ。かゝる時代錯誤の淺間敷しき愚かなる状態をまさまじく見聞する場合に於て、少しく眼界が廣く、又近世經濟眼を具有する識者から、ともすれば口を揃へて報徳教及報徳社の事業を時代錯誤なりとして誹謗され、或は又報徳社をもつて、過去の事象とする人々のあることも萬更ら無理からぬ事であらう。

されば二宮先生の報徳教及報徳社の本質は、全體何處にあるかを考へて見る必要がある。さもあれ吾等の研究する處では報徳教とは、先づ先生が自からの境遇上、強よく生んがために、謂ゆる自力更生の道を開拓し、又更に進んでは社會救済の念願を思はするにあたつて宗教や書物や學者の説を鵜呑みにしないで、唯だ夫等を参考に收捨撰擇して長所を執り、或は又天地の運行、自然の循環森羅萬象の状態を観察することによつて、人生は斯くあらねばならぬ、斯くなさねばならぬとして、自から實踐窮行されたる體驗に基づいて教へられたるものであつて、先生の遺著を通じて一貫するものは、夫が又、我が國民の特殊性に本づける自由獨立の精神に據りて、皇祖の建國當初の抱負を發揮せむことを目的として解説遺命されたる一種獨特の日本

教であることを知ねばなるまい。それは先生が時と場合に應じて報徳道を斷片的に詠まれたる教訓歌が、又それを雄辨に訓へてゐる。

- 古へは此世も人も無かりけり、高天ヶ原に神いましたつ
 - 此道に積る木の葉をかき分けて、天照る神の足跡を見む
 - 天地の神と皇との恵にて、世をややく經る徳に報いよ。
 - 音も無く香も無く常に天地は、書かざる經を繰り返しつ
 - 忘るなよ天地の恩皇と親、我と妻子を一日たりとも
 - 思へたゞ唐學びする人とても、我身を恵むこの日の本を
 - 受け得たる徳を各々譲りなば、四海の間父子の親しみ、
- 先生の歌詞に含む要旨を研究思索してみると報徳とは、その究極に於て、人を益し我を利し國家社會に貢獻することが、我等人間の絶對のためであつて、斯くすることは結局忠孝の道と一致することになるのである。又二宮先生の一生はその實踐窮行であつたのである。

第十章 報徳教の新生命

苟くも社會教化のために二宮先生の遺教を傳へんとするものは、唯だ先生の遺著に盛られた

る限定された文字そのものに執着するが如き、迂濶、愚鈍、固陋、頑迷であつてはならぬ。謂ゆる眼光紙背に徹する活眼を開いて、報徳叢書一萬卷の書物に流れてゐる潑刺たる先生の生ける精神の溢れるものを既味するものがなければならぬ。即ち無量一萬卷の遺書に溢れてゐる報徳の道を時代と共に廣大し精研し、滋味を攝り、時代の用に貢獻すべく普遍化させて、新時代の國民道とする高邁なる用意がなければならぬ。併せて又、當時先生が、最も大膽率直に宗教家や學者の説でも、國民生活の實際に嵌らぬものを指摘し批判して報徳の大道を力説されたものであることを忘れてはならぬ。然も又先生は、その時代の疲弊の據つて来る原因を指摘して應病投藥されたる勇氣と常識と又周到なる用意のあるものを學ばねばならぬ。謂んや幕末に於ける武門政治の餘弊と併せて神道、儒道、佛道諸流の頹廢するものを破邪顯正して、報徳道の創始に努められたる活眼と配劑の妙諦を看取しなければ、報徳教社の事業は成立ぬことを反省する要がある。

斯くしてこそ二宮先生の遺教は 永久に生命を持続するであらう。又能く國家社會に貢獻するものと信ずる。憶ふに二宮先生は無意識の裡に新興日本の國教たる可き報徳教を創始される日本精神の權化であつて、又先生の創始されたる報徳教は執りも直さず前にも再々言ふたやうに、日本教の代名詞であるを知らねばなるまい。されば今、國家的國民的の一大飛躍大發展の

前の更始一新、非常の秋にあたりて、先生歿後八十年、先生誕生百五十年を記念する吾等日本國民は、報徳教が日本精神涵養の源泉として、更に新しい意義を有たねばならぬ秋に際會したことは、何かそこに深い意義と使命の宿されたものであることを信ずるがよい。

されば、當時先生の高弟富田高慶大人によつて綜合されたる報徳教の四綱領だけでは、今や興新日本の綱領としては、吾等は少しく物足らなさを感ぜられてならぬ。固より後學姪々の吾等として甚だ潛越ではあるが、教祖二宮大先生の立教の精神を追慕し、先生の思想を愛慕崇敬するとき、先生の遺教を今の日本文化の時代に意識化するには、高慶大人の撰ばれてゐる至誠勤勞、分度、披瀝の四大徳目を更に倍加細目して、尊法、自治、共同、助成の四大徳目を追加し、八大綱領とすることが最も妥當であつて、又必務なりと信ずる吾等は、或はかくの如き新綱領を發表することは斯界の先輩に異常なる感覺を與へ、或は又甚だ怪しからぬ沙汰であるや大いに誹謗を受くることは無いとも言へない。けれども、古き皮袋には新らしき酒は盛られな

いと云ふし、西哲の遺したる警句を味ふてみると、日進月歩の新時代に、最も力ある報徳教化を布かんとするには、どうしても斯うした時代の耳に新らしい、又現代の人々の常識に直に受け入れられる解説なり、仕法なりでないことと結社の根本精神を注入普及することが困難であると信ずるからである。況んや釋迦の教でも孔子の教でも、收拾撰擇を自由自在にして 我用に

なるべきを攝り入れて新らしく立教されたる二宮宗の遺教を繼んとする吾等報徳教徒には、今時、此位いの新鮮味ある新らしい解説を持つことは、先生の教に忠ならんとするものゝ當然の道であつて、これが又、報徳教普及化の趣旨にも叶ひ、併せて世間の誤解にもとづく誹謗にも答へうるものであり、又、一層普及に便ならんとするものである。

今、爰に吾人が提唱する八大徳目を列べると次の様に説明することが出来る。

新選 報徳 八綱領

試みに新選八大徳目に、大先生の教訓歌をはめてみる。

- 至誠 米蒔ば米の草生え米の花、咲つゝ米の實る世の中
- 尊法 思へたゞ唐學び人とても我身を惠む此の日の本を
- 勤勞 天地の恵み積をく無盡藏、鋤で掘り出せ鎌で刈りとれ
- 自治 腹くちく喰ふて搦き挽く諫めは佛心と悟るなりけり
- 分度 めしと汁、木綿衣物で身を助く其餘は我を賣るものなり
- 助成 ちうちうと悲しむ聲きけば鼠の地獄猫の極樂
- 推讓 身を務め分を各々譲りなば基固まりて邦の安さよ
- 共同 受け得たる徳を各々譲りたば四海は父子の親しみあり。

第十一章 報徳教の新八大徳目——至誠と尊法

第一に擧げた徳目の至誠は絶対的のものであつて、今更ら事あたらしく言ふまでもあるまい。古人も既に唱渡されてゐるやうに、至誠は即神の如く時代を超越して萬世不易のものである。先生の教訓歌に、『己が子を惠む心を法とせば、學ばずとても道に至たらん』とあり、又、『米蒔ば米の草生え米の花、咲きつゝ米の實る世の中』とある。又『菜かけしが種蒔く手は分らねど、春咲花は疑ひもなし』とある。稗を蒔うて米を取らんとする様な不正實は絶対にゆるされない。宇宙の法則に従はなければならぬとする絶対を例にあげて第一の徳目を守れと教へられたものである。孔子様が誠は天の道であり之を誠實に守るが人の道であると教へてゐられたが、吾々凡人には其では餘り大ざつばであつて道に入るのがむづかしいから、二宮先生は更らに其心を二つに分折して、天道と人道に區別して實踐の要道を示されてゐる。こゝに二宮先生の教に忘れる事の出来ない明朗さがある。天道とは即ち自然の方則であつて冬は寒い、夏は暑い、火は熱い、水は冷たい、日が入れば夜となる。が時が來れば、東天に太陽が登つて明るくなる。水は低きに流れる。物を喰べても時が経てば空腹を感じる。新らしい着物もいつかは破れてしまふ。赤坊も遂に白髪の老人になる。是は何れも自然である。即ち天道である。吾等は別に人

道を立てて、米を收穫するために米の種を蒔き、育て、刈り、而して食糧とする。寒い冬でも凍死しない様に厚着をする。炬燵、ダン爐の用意をする。空腹には絶へないために貯蔵をする。雨天の時の用意には下駄と、外套、レインコート、雨傘の類を用意する。これ等は凡て人間生活に必要なものを充すために協力で努力する。この心がけこそ報恩感謝の實行であつて、人道と云ふものであり、その心がけを養ふ大本を至誠と言はれたのである。

第二の徳目は尊法である。立憲自治の制度が布かれた昭代に生を得てゐる吾等國民が、法治國の民として、國法を尊守することは、何の不思議もない常識である。然るに警察も裁判所も刑務所も毎日繁昌する。却つて教育が普及し文化の進むにつれて犯罪人が多くなると云ふことはどうしても理屈に合はぬ。既に憲政布かれて四十年以上になる今日でも、尙ほ厄介な選舉肅正を叫ばねばならぬほど、世の中はなげかわしい非法治國の實狀である。

爰に於てか、強い立憲法治國民が道徳意識を涵養するために尊法の徳目を起して、法治國民としての修養を全ふする事が必要になつて來るのである。同じ國法を守るとしても、今までの封建專政治下の國民生活とは大いに異なり、國民の生命財産は國法に據つて最も安全に保護されてゐるし、其法律は兩議院の協賛によつて、國法となるのである。然し時代の變遷によつて前に定めてある國法の規定が、國民の生活に添はない場合には帝國議會を通じて合法的に改廢

され、又は請願令による下意上達の道も拓かれ、今や民意の伸張は十分に出來うるやうになつてゐる。かるが故に法治國民としての常識を常に養ふ必要がある。即ち尊法の徳を涵養することが必要な譯である。

第十二章 報徳教の新八大徳目—勤勞と自治

第三に擧げる徳目は勤勞の徳目である。これは謂ゆる儒教の天行健自強やまさるに當るもので、勤勞なき所には生産は無い。勤勞は人生の大切な要務である。一日爲さざれば一日食はずとは、故聖人の守つた金言である。勤勞なき生活は罪惡である。勤勞は人生の義務であり責任である。原始遊牧時代の生活は極めて簡單貧弱なものであつて、遊牧即それが勤勞であつたのである。今でも、北海道のアイヌや臺灣南洋あたりの蕃人の生活は、原始的な勤勞である。従つて彼等の生活は原始的な貧弱さで、文化人の半時だつて堪えられない貧しさである。即ち彼等の生活は自然的であつて、人道的まで進化してゐない。故に彼等には文明の輝が無いのである。農藝化學を應用し、理科的な機械器具を發明して生活する現代人の生活は、又、勤勞も規則的であつて能率も高く擧る。それは向上したる慾望を充すために必要だからである。愈々慾望の向上した文化人は、より多くの勤勞を必要とする。然し人間は一體どの位に稼げるもの

であらうか。人生を先づ六十年と假定して、其の生涯中に稼げる時間の極めて僅少なものであることは、次に載せる表で一目に能く分る。

人生十六年中労働時間



斯かる僅少な時間しか働く時間のない吾等が、高い豊満な生活をゆるされることの如何にありがたいかを思ふとき、愈々勤勞の徳目を守るの大切さを痛感せずにはゐられない。然し爰に考へなければならぬことは、勤勞が如何に大切であり、又重要な人生の勤めであるにしても、若し流儀も組織もなく、唯だ營々として働く事、彼の牛馬の如きものであつては

ならぬ。働いて自分の流す汗水に流されて、遂に借金的大海に墜落する如き愚さであつてはならぬ。飽くまでも現代人の勤勞には秩序あり計画ありて、又、必要なほどの資本の融通の利く組織の下に所得する額を多くして、愉樂悦樂の中に自他を幸福にするものでなければならぬ。かくてこそ、勤勞は神聖であると云へる。その詳しくは拙著「勤勞神聖論」に述べてある。併讀されんことを。

續いて第四番目に擧げる徳目は、最も我が日本に發達の後れてゐる自治の徳目である。市町村自治制の布かれて既に五十年を経てゐる。この長い時間を経てゐて、今尙、我が自治體は自治の事績に向みるべきものが無い。舊態依然たるものである。封建的名主庄屋時代の因襲が附隨してゐて、自治の芽は一向に伸びてゐない。かゝるが故に只管、官廳の指示にのみ依頼する準官僚的な無識の首腦者が多く、何處の役場も委任事務に没頭して能事終るとイヤに済して居る衰れた状態であるから、村落の生活が行詰つたのである。斯くの如きは、階級制度の厳格なりし武門武士の壓制政治が長らく續いて、人民の多數を見ることが、丸で牛馬に等しく、人民はすべて武士階級のための生ける納税機械であるかのやうに抑壓されてゐた舊弊が、今尙抜けなためであらう。全國的にみて、村長は樽長にあらざれば、又、損長なりと云ふ戲言もあるやうに、折角名譽ある市町村長の職に就いた人々が、殆んど言ひ合せた様に破産し、又は倒産

に頻する状態であつて、確かに損長の字儀を明らかにしてゐる人が無いとは言へぬ。町村を指導する一流處の人物に於いて此の如き淺敷しさである。二流三流處の家が多大の負債に苦るしき、近時自作農家は没落して、ヤタラ小作農が増加すると云ふことは與へられた自治の權能を充分に運用することに務めない處に原因するものであることを反省せねばならぬ。

吾等は此の期會に於て、市町村制發布に際して下されたる御勅諭と又町村制全文百六十一條中の眼目たる法第二條の全文を掲げて、斯くの如き有難き勅諭と法の恩恵に背いてゐる怠慢を反省し、自治精神の涵養に努めたいとするものである。

法律第一號を以つて市制及町村制を發布さるゝに際し當日長くも賜はりし

聖旨

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ、隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益々之ヲ擴張シ、更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ、茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

明治二十一年四月十七日

御名 御璽
町村制

第二條 町村ハ法人トス官ノ監督ヲ承ケ法令ノ範圍内ニ於テ其公共事務並ニ從來法令又ハ慣例ニ依リ及將來法律勅令ニ依リ町村ニ屬スル事務ヲ處理ス

第十三章 報徳教の新八大徳目―分度經濟と福の神様

第五に擧げる徳目は分度の徳目である。これは重に經濟上に關する徳目である。此の徳目の研究が、過去に於て餘りにも淺薄であつたがために、その論旨が徹底しないで、報徳教徒と謂へば誰でも直ぐ消極一點張りのけちん坊か、又は頑迷固陋の徒位いに見られるやうな場合が無いとは言へぬ。これは誠に惜しみても尙餘りあることであつて、報徳教のためにも、又一般國民生活更生の爲にも、此の際斷然、その過誤のある處を訂正して、經濟生活上、更生の新らしい基本と様式を發見するやうに努めなければならぬ。よく世間で聞くことだが「報徳もよいがア、まで生活を消極的に制限されては仲間に入らぬ氣にもなれない。況んやあれでは、世の中が益々不景氣になるばかりであるから、御免蒙りたい」と云ふ様な言ひ草を再々聞かされる。然しそれは未だその一を知つて、その二も三も四もあることを知らざる粗忽者の言葉であることを知つて貰ひたい。成程、分度を立て、生活を更生し、收入の四分の三で生活費を制限せよと教へてあることは事實である。然しそれが報徳教の全部であると思へば大變な間違である。

少なくとも報徳教の八大徳目だけは傾聴してもらはなければ、報徳教でいふ處の分度經濟を必要とする眞髓が分るものではない。況んや生活更新の必要を感じてゐる人々も、又、農村經濟更生の必要を指導する役目をもつ位いの重要な立場にゐる人達總てが、新しい時代に處する新しい生活の組織と改善の指導原理に盲目的であつて、且又、人生に處する信念も無く、その日その日の享樂生活こそ人生であるかの如く考へてゐることが今の過れる世相でもあるやうである。彼等は人生に對する深い考方が皆無であつて、甚だ不眞面目である。又無理想でもある。かるが故に、人生を正しく行かんとする吾等報徳教者に對する誤解があり、又非難が起り易いのである。

今一つの過りは、過去に於て我等の祖先が、封建時代に武士階級から強要されたる、階級的身分相應と云ふ甚だ理不盡なる古い徳目その儘のものを、直ちに我徒が受賣りしてゐるかの如くに早耳して、自分の陥つた過誤で獨斷して吾黨を非難する徒輩もあるやうである。

會て新潟縣下を巡回したとき、縣下の大地主であつて、一時は縣農會長にも擧がり、又地主會長に擧つたほどの人の家に泊つたことがある。その時その老人が、自分は報徳教の話はまことに結構であると思ふが、唯一つ行なへぬことがある。其は外でも無い、今日君の話されたる分度經濟は、何う考へても、我家の經濟には應用が出來難いとの反問であつた。かりにも大地

主である此家の主人が、そうした反撃を加へるのは、何うした理由かを一寸判斷するに苦んだから、貴殿は何うして、分度經濟の話が理解出來ないのでせう。出來ることなら實際問題について、貴殿の蒙を拓きたいから、貴家の一年間の豫算書なり、又は決算書でもよい、是非見せてもらいたいと云ふたら、宿の主人の曰くには、御覽にかけるまでも無く、僕は十三人の子供を持つてゐるから、子女の教育費が莫大にかゝつて、今の處、毎年赤字で缺損であるとの言ひ分であつた。その人の口から子供の多いと云ふ事を聞き、此人は實直らしい風態ではあるが、或は妻の二三人を持つてゐて、ために子供の多いのであらう。假りに教育費が多くかゝるとしても、此家の収入からみれば決して赤字處か分度經濟の立ぬ筈はないと直に睨んだから、子供衆の多いのは幾腹であつて、外妾の生活費は何の位かゝりますかと詰問した處、主人は非常に激興して、僕の人格を傷けるとは不都合千萬である。一人の正妻は子供何人以上産む可らずと云ふ天則があるか、抑も吾輩は十八歳で結婚した者だ、當年取つて五十歳、十三人の子供は正妻一人の腹から出たものである。と席を直しての詰問が出で、遂に老生は外妾云々の過言を取消して、ヤツと其場は治まり、後で一笑したことがある。その時、教育費の莫大にかゝる由來を聞いてみると、適子某が國立の美術學校を出て、今は美術研究のため佛國巴里に遊學してゐて、年に數百の學費を送つてゐることが分つた。詰りその人は教育と云ふことを、餘り廣義に

解釋して、道樂半分の繪畫行脚を、大した教育の様に考へ違ひをしてゐる親馬鹿チャンであることが分つた。それからして丁度十年目に又、郡教育會の招待で下向した時、再び其家に歡待されて泊つた。十年前に聞かされた其家の長男で美術家の玉子の某は、數十萬の學費を浪費したばかりで、地方展覽會の賞に入るやうな繪もかけず歸朝後、村役場へ出て耕地整理の事務を執つてゐると聞いた。これは今の誤れる教育中毒の最も恐ろしき一例である。その人の愚さを笑ふことも出来ないほどに、却つて氣の毒に思はされたことがある。

抑も分度經濟法なる者は、之を自然の現象について學べば、春になれば種は生て花を開き或枝葉の發育を始める。夏はそれが育成繁茂する。秋は結實し冬は種子となり、又はきう魂となりて貯藏される。夏期に入つて結實する麥は、秋の一期を休養し冬に成つて播種され寒中に分けつのである。蛙は餌食となるべきこん虫が蔭れるから又土に入る。蛇も同様餌が無くなると穴へ入つて冬眠する。松拍科の植物も冬は冬眠するのである。収入を四分してその一を天引して貯へ、四分の三を以て生活豫算を立てることが正しい美しい手堅い生活であつて、夫が人道であるのである。又更らに精神的に考ふべきは、我日本の守護神であらせらる出雲の二柱の神様を呼ぶに、俗に福の神様と崇め祀ることは、古來一貫したる大和民族の傳統であるのである。その由來する處を研究してみると、二柱の神様の御姿そのものが、吾等國民の正しい生

活の道を御示しなつてゐることが分明する。されば右手に御持ちになる打出の小槌は勤勞の表示であつて、働けば必らず生産あり、生産すれば必らず収入のあることを御示しになつたもので、大きい頭巾を御被りになつてゐる處は、「上みれば及ばぬことの限りなし、笠着てくらし己が心に」と意味を教へられたものであつて、無限に伸びる慾望を適度に壓へるの必要を教へられたものである。又、左手に持たれる大きい袋は、収入した四分の一を天引して貯蓄することの必要を御教になつたものである。更に又、耳が大きく御眼英敏であられる、それは見聞を廣くして、修養を怠らぬ様につとめ、慾に負けない様に強く身を持たなければ四分の一を袋へ貯へることは出来ないといふもので、又大黒様と言へば必らず米俵の上に御据りになつてゐられるのは、斯く努むることによつて生活上の不安は一掃されて喰ふに困る様なことは無い。人生の大務、即ち生活の道の眼目を教へ示してゐられてゐる。而かも大黒様一柱では充分でないから更に、恵比壽様は積極的に、突進向上一的生活を教へた神様であつて、即ち萬事消極的にかまへて御教へになる大黒様の頭巾とは反對に、冠を被つておいでになるのは、「下みれば下みるほどに限りもなし、笠とりてくらし己が心に」と云ふ向上の意味である。そして跣足で物に腰を掛けて、更に釣竿を持ち、大きい鯛を抱へて御座るのは積極的に進出と向上の要あることを御教へになるもので、釣竿とは、資本の必要なることを形に現はしたるものであつて、

假りに幾ら大きな鯛を釣上げても、もし資本を他人に借りてゐては、その儲けは他人に取られて了ひ、遂には後に残るものは頭と尻尾と骨のみであると云ふ工合で幾ら稼いでも儲けても、生活が向上するこゝとが無いから、前の大黒様の御姿にならつて慾望を抑へ儲けの四分の一を袋に貯へて積みかさね、釣竿と云ふ資本を蓄へ、自立自營の出来るやうにやることを教へて御座るのである。古來我が大和民族の家庭では何處の家でも此の二柱の神様を、崇め御迎へして祝ひ、そうして朝夕信仰するのも、この意味と由來があるからである。我等の外に、世界には幾多の民族があると云へども、こうした結構な生活を教へた福の神様を授つたものは、我々日本民族のみである。爰にも又、民族的恵みの大きいことを感謝して、大いに報徳の精神を發揮しなければなるまい。即ち分度を守つて豫算生活を實踐せんがために、かゝる修徳の必要を報徳實行の一要目に選んである譯である。

昨今、奨励されてゐる産業組合の普及も、又農村經濟更生も、分度經濟と云ふ、大切な徳目が理解されて、組合員たるものが豫算生活を確實にして、生活の更新を實行しないかぎり成績のあがるべきものでないと云ふことを極言するものである。これが又町村に應用するにどういふ風にやつて行くかと云ふことは、拙著目的小説『理想の村』に詳しく書いてある。その要旨を一寸書くと、昔流儀に、牛馬の様に稼いでゐる中に、莫大の借金が出来て了ひ、諺に云

ふ、貧すりや鈍するで貧窮暗黒道に墜ちて了つた××村は、一人の新報徳教の傳道師の指導によつて、報徳の教と産業組合の知識を和合折衷した村家更生の方法を教はつて村民一同が生活上の更新を圖り、蓄積される零細な貯金を甘く資本に利用し運用することによつて、村の生産物は大いに増大し、販賣と購買に利用の方法が甘く行つて収入が増大し、従つて気分も一新して遂に光明の輝やく理想の農村が實現したと云ふ風に書いたユービヤである。必らず出来る可能性のあることを幾多の方法と實例などを擧げて書いてある。もし眞に農村經濟の更生を圖らんとする誠意があるならば、少なくとも拙著「理想の村」に掲げてある位の用意と高い目標を樹立してかゝる必要があるこの必要を感じたとき、始めて分度經濟の話も理解されると云ふもので、やがて實行慾も起きて來るから行はれるものと信ずる。

第十四章 報徳教の新八大徳目―助成と共同

次に第七番目に擧げたいのは、助成の徳目である。前の分度の徳目涵養の必要なことを力説するにあたりて、吾等日本民族は二柱の福の神様を頂いた、恵まれた有難さを書いた。更らに之を説明すると大國主命即ち俗に云ふ大黒様は、自力更生の形を教へ授ける福の神様であつて、よい教を授けて御出になるが、自力だけでは人生は渡れるものでないから、共同助成の必

要なることを、事代主命即ち惠比壽様は釣竿と鯛を例にあげて教へて下さつてゐる。これまで多くの産業組合なり、又報徳社等が、口には共同團體であると云つてゐるけれども、事實は村の有志者の共同戦線であつて、村の多数を占むる小作者貧民等は、一向その仲間に入れられてゐない。彼等は眞の勞資協調の大切なことを知らないで、土地や金錢を澤山有つ者さへ團結すれば、天下は無事泰平に治まつて行くかのやうに錯覺をして、大きい間違をやつてゐる。彼等は、生産には資本の外に、勞力の尊さを考へる目が開いてゐない。小前の者を道連れにする事は、手足纏ひになつて厄介である、仕事が出来ないとうそぶいてゐた。吾人が聲を噎して説く新報徳談を一向傾聴しようとしなれてゐた。かくて、村方には、突然、小作争議が續出して了つた。或はそれが起らないまでも、組合も報徳社も行詰るときが來た。それは勞資協調の要務を知られなかつたためである。或は知つてゐても自分達の特權にのみ執着してゐて、時代の進化と云ふことに盲目であるからである。小民を助成して産を成させると云ふ同情心は、他人のためのみではない。「清けは人の爲ならず」といふ金言は、自己の存在を堅固にする方便にもなることが彼等には分らないのである。村の人々上下で勞資協調する、協同の力をもつて村内の貧農を保護し助成すると云ふ、道徳心が發露するとき、自然に村内有産者の財産の減滅することを防ぐ道が自づと行れて來るのである。

それがやがて又愈々村の生産物を増大する基本となるのである。又、組合や報徳社に貯金の増加する源ともなる。貯金の増加することは必要なる資金の豊富になることである。村一般の財力が伸び生活が向上することによつて、今の少數者の負擔する重い村費も、又文化生活費もかるくなることを考へるがよい。たとへば電車汽車が多人數の乗合であるから、僅かの金で便利されるのと同じいのである。元録の昔、彼の淺野内匠頭の切腹の次第を赤穂城下に注進したときの早籠は、有史以來の快速力であつて、江戸から赤穂城下まで六百八十哩の道を僅々に三日三夜目に馳せ着けたといふ話である。三日三夜とは廿四時間を三倍する事で七十二時間になる。今では汽笛一聲、東京驛を一番列車で發つて、普通車でもその日の夕方には赤穂に入れる。もし急行車なれば、それよりも二三時間は省略出来る。姫路までの急行券と寢臺券を買つても全部で二十圓足らずの金で間に合ふ。その時赤穂まで飛ばしが駕籠賃は莫大なもので、今ならば或は亞米利加から歐洲までも世界一週をする旅費にも足るかも知れない。人生には共同助成を必要とすることが理解出来たなら、町村の有志者達が、虚心担懐、此理を能く呑込で、組合と報徳社とを合併して團結を強固にせよと注告するものである。この意味に於て助成の徳目を擧げたのである。これは確かに二宮先生の報徳道の精神に叶ふ徳目なりと信ずるからである。更に忘れてならぬことは共同の徳目である。前の助成の徳目は共同の徳目の中に加はるもの

であるが、未だ共同心の貧弱なる今の時代の有様では、小分して證明する方が分りよくて、その必要を理解することが早いと思ふので、別目を置いた譯である。

元々、人間は共同生活を絶對の必要とする運命の下に生まれてゐる高等動物である。「人は萬物の靈長なり」と教はつてゐることは、決して人間社會の自我自讃では無い。凡ゆる生物の内、文化を有つてゐるものは人類のみであることを思ふても分る。事實は最大の雄辯であつて、又、事實そのまゝであるのである。誰だつて、人類として生を得たものが、孤立して生活に堪えうるであらうか。我等の人生は、絶對に孤立は免されないのである。即ち生れるとき既に父母がある、祖先があるのである。母の體內を出ると直ぐ必要とするものは衣服と食物である。衣服も食物も、又それから一生涯を通じて必要なる生活資料も、自分一人で間に合ふ部分は極めて僅少なるものであつて、殆んど他からの供給によつて、満されてゐるではないか。又男女とも成長して、年頃になれば、假りに三三九度の式を擧げることが省略して、簡単に済しても家庭生活を営まなければ人生は濟されないのは理屈を超越した動かすことの出来ない絶對の事實である。もしたまさか對立するものがあるとすれば、それは千百萬人の一二であつて、聖人に非らざれば不幸なる奇形兒か、又は狂人か病人である。我々人類は生活の慾望を擴大すればするほど、共同生活の廣大を圖る必要がある。これを國家で云ふなら、日本と朝鮮の合併

がそれに當るのである。合併後の朝鮮の文化は速進されつゝある。兩國人の幸福も増進されつつあるのだ。然るに今現に吾等が凡ての點に於て生活上の不安と不備を感じるのは、幸福を増進するために、當然なさねばならぬ共同一致の行動が未だ充分に手が着かないので、徒らに古い習慣に執着してゐるものがあるからである。爰に一例を擧げると、筍子は成長するに従ひて自から生活に不用とする皮を離脱して行く、たゞ一本の筍子の生活と成長する状態を見ても、強い唆示があるではないか。



第十五章 報徳教の新八大徳目―推讓

第八番目に擧げる徳目は、報徳の王ともいふべき推讓の徳である。推讓と云ふ二字そのものが余り廓が多くて一寸字をみた丈でも、何となく難解らしく、従つて實行慾の起らないやうな

氣がする。そうした気分は昔の人でも、今の吾々にも共通するのではなからうか。人情の機微に通じた常識大人の二宮先生は、人生は物質的にも精神的にも推譲の徳の大切なることを力説されたものだ。或時、弟子一人を連れて箱根の温泉に入湯したとき、湯船の中で弟子をとらへて當意速妙の實務教育をやつてをられるから頗る面白い。御陰で吾等も又、早く推譲の教が呑込めると云ふものだ。二宮翁夜話一の巻、三十八章の一節を一寸引照する。

翁湯桁に居まして諭して曰く。夫世の中、汝等の如き富者にして、皆足る事を知らず、飽くまでも利を貪り、不足を唱ふるは、大人のこの湯船の中に立ちて、屈まずして、湯を肩にかけて湯船は甚だ浅し、膝にも満すと、罵るが如し、若し湯をして望に任せば、小人童子の如きは入浴する事あたはざるべし、足湯船の浅きには非ずして、己が屈まさるの過なり、能く此過を知りて屈まば、湯忽ち肩に満ち、自づから十分ならん、何ぞ他を求る事をせん、世間富者の不足を唱ふ、何ぞ是に異ならん、夫れ分限を守らざれば、千萬石と雖ども不足なり云々（下略）

併せて一寸一言書くが、吾々が口より食物を攝り込むだけでは、忽ち糞詰りになり、病人になつて了ふ、伸びる髪や髯は時々理髪する必要がある。吾々の日常なさねばならぬ、又なしてゐる生活から考へても、理髪すべき時に理髪もせず、入浴もしないでゐることは、野蠻人の生活に似たやうなものだ、今の社會生活をもつて、萬全なる文化生活の様に考へてゐる愚かもの

があるときは人間社會は、いつまでも不安が絶へないのであることを考ふべきである。

先生は、又、ある時は、鹽に水を汲んで多くの弟子達に推譲の大切な徳目であることを説教されて居る。

人間の腕は前へ伸して物を取ることも出来るが、又必要に應じて後の方へ返すことが出来る様に生れ着いてゐる。これは西洋人も同じで人類共通である。然るに同じ生物でも人間以外の動物の腕は、これ又萬國共通で後へは廻らぬやうに生れ着いてゐる。彼のクロバトキンが多くの生物の生活をみて人類も又、無差別の共同生活の理論を説く中に誤りのあるのは、此重要な差異のあることを見落してゐるからである。又ダーウキンの進化論にしてからが、此點を見逃してゐるから、下手に若い人がダーウインやクロバトキンを讀むと大きい間違の起る原因となるのである。二宮先生も進化は認めてゐられることは吾人と同感である。が、吾等の進化論も二宮先生の進化論も、そうした差別のあることを實生活の上に於て知つてかゝるのだから、推譲と云ふ徳目が樹つて来る。明治中期に於て、その頃の貧村であつた伊豆國稻取村の經營に當つた田村氏が、新しい形の報徳結社を村に行つて成績をあげ、成功して名をなした。私は田村氏を尋ねて面會したとき、下の様な教訓を認め田村翁一流の新報徳談を話してくれた者だ一、人の利益のために我が利益を犠牲にするは神の道なり。

一、人の利益と我が利益と共に計るは人の道なり。

一、我が利益のために人の利益を犠牲にするは畜生道なり。人の道、人の心の誠かな

(其の田村翁の新報徳仕法の事は、拙著『報徳教及結社の鑑』に詳載してある。)

然るに今の世の中の有様をみると、鹽の中に閘門を造りて我が水は此閘門より出す可らず。他より押し呉るる水は、閘門より取り入れて放つ可らずと云ふほどに、セチ辛ひ状態である。若し迂濶に此話を聞いて、下手に鹽の水の譬諭を眞似ると、自己は常に水の無き境涯に苦しまねばなるまい。爰に於てか推讓の進化が無ければならぬ。かるが故に現代の道徳律は『自己の利害を多數の利害に一致せしめよ、若し如何にしても一致せぬ場合は、多數の者に自己を捨てよ』といふのである。

多數の利害と云ふ處に推讓の意義があるのである。假令ば今日保たる私財の一部を明日に残すのも、子孫に對し讓るのも、又公共のために讓るのも、博愛慈善事業のために奉仕するのも皆この推讓のためになさねばならぬ努力である。

而しながら、今日の推讓は單純なる社會のためと云ふ様な盲目的の犠牲は、或は害を残すとも効果無き場合のあることを考へて組織立つた方法で奉仕する要意がなければならぬ。

前にあげた田村翁の處世觀とも云ふべき教訓の中に、神の道と云ふ行ひがある。古來、臣下

にして神に奉祀されたる人々の生活がそれである。又、人の道と云ふ行ひがある。これは吾々凡人にも行へる道であつて、又なさねばならぬ道である。推讓の徳目は此意味に於て最も大切である。而し之を行ふには強固なる報徳社とか又は産業組合と云ふ組織をもつてかゝることが最も賢い行爲であることを知るがよい。而し大乘的に眼の開かない現在の報徳社ではそれはむつかしい。

以上に挙げた八大徳目は、之を今の交通機關に譬へて例を引けば、汽車である。報徳と云ふ機關はレールと云ふ八大徳目が養成されるとき、最も光輝を發してよき生活と、よき村をつくる。然り東海道を走つてゐる流線型の機關車は東京神戸間を僅か十時間で走る。それは三十ホイの新しいレールの上のみの快速力を出し得るからである。同じ報徳教でも古るい行燈又は灯燭形の解釋や説明のみを暗しうしてゐては何時までたつても、報徳の夜は明けない。そのことにつき、爰に生ける實例がある。時勢を知るものゝ知らねばならぬ事柄である。

今からザツと三十年前の事である。戊申詔書の喚發を奏請した桂内閣の内相平田東助氏は、内務省に報徳教普及のために専任の講師を置いて、各府縣郡町村と連絡をとつて、盛んに報徳教を宣傳すると共に、報徳會又は諸社の獎勵をしたものであつた。

大小の報徳講演會は山村水廊の村落にまで開催されて、まことに盛大なものであつた。そし

て全國に組織された報徳會の數は無量六萬を數へたわけで、苟くも部落ある限り、報徳會の組織なきことを當時、村落の人の恥であるとする位のものであつて、信州あたりでは報徳狂まで出したもので、老生のスクラブツクには次の様な、萬朝報の切抜きが帳付されてゐる。

報徳狂の家出 (廿六日午後長野發)

埴科郡埴生村宮坂三治(廿六)は報徳社員にて評判善き男なるが二宮尊徳翁崇拜の餘り精神に異常を生じてか我れは二宮翁たらん爲め廿一日間成田山に斷食し夫より七年間諸國を廻らんと親戚の止むるも聞かず廿五日飄然成田に向け出發せり(大正二年二月廿七日萬朝報載る)斯くも報徳會の數は無量六萬を數へ、さては狂人までも出したアトの状態は何うかと云ふと今は雲散無實、景も形もなくなつて了ひ、報徳主義による勤儉貯蓄どころか今は一農家平均して一千圓の負債を負ふて居る始末である。

而も當時に於て大藏省の發表した、明治四十一年度の調査では全國農家の負債九億四千萬圓を數へてゐるが、今は六十億と云ひ或ひは七十億と云ふ巨額の負債であつて、今行はれてゐる様なこそくな負債整理組合などの小策では、その解消もむづかしかるべきを思ふとき、想起するものは推譲共同助成による二宮式月賦循環負債整理の原理であるのである。この方法は拙著

「理想の村」の近刊の中へ書いて附録としてある、御参考ともなれば幸ひである。

話は前に戻る。或は今度の八十年記念祭を奇縁として、諺にある苦しい時の神頼みと云つた状態で、今後報徳會の組織は又々非常なる勃興を見るかも知れない。それは決して悪いことでは無い、喜ぶべき事と思ふが、けれどもそれが、過去のそのやうに水の上の泡のやうに直ぐ消えてなくなるやうな愚ひを繰返して、淺薄杜選なる、時代錯誤のものであつてはならぬことを再言しておく。近頃村落を巡回すると誰が教へたことか知らないが、簡易報徳社なんと云ふ看板を掲げてゐるものを見ることがある。今最も重大な農村經營の一大進轉期にあたりてかうした兒戯に等しい小策を弄してゐる状態をみて、時勢を誤らぬ農村人のために吾等は心から泣けて熱い涙なきを得ないものがある。眞實に農村の偽を思ふなら、そうした小策を弄して居る間に直ちに今の報徳社を更始一新して報徳主義を基調とする産業組合の組織に突進することが何故に出来ないものであらうかと疑はさせられる。今は徒らに古人の俎薄のみ賞めて事足るやうな場合では無い。村落に散在する既設報徳社の多くが、既に行き惱んで危救の場合でもあるのではないか。

第十六章 報徳教の大乗道と小乗道

例へ共存共榮をモットーとして、高く旗示を掲げないとしても、一つの團體を組み、結社をするからには、共存共榮を意識した上での行動勞作でなければならぬと信ずる。然るに共存共榮をモットーとして起つた多くの團體的事業が、何うしたものか一向成功してゐない。寧ろ個人的の事業の方が業績を挙げ易い様なまことに情けない状態にあることは、吾等に何か反省させようとして居るものがあるまいか。近事、公益共同の美名を持つ團體にして、美名に反して、却つて共同破壊を實行しつゝある様な事實が隨處隨時尠くないことは、甚だ遺憾なるところであつて、何か組織組立の方法に於て、大きい缺陷があるためではあるまいか、もし何處かに多少でも缺陷がある場合には、その禍根の生ずる原因を正してかゝらない限りは、淺らどんなに努力したつて、賽の河原の石積同様、折角積んでも積んでも積む片端から潰れて了つて所謂百年清河を待つに等しい悲哀がある。即ち共存共榮をモットーとして起つ産業組合の不祥事の多いことと又報徳社にも同様の事實の尠なからざることは苟くも共同事業の指導にあたるものが無關心で居られるものであらうか。

吾人はこれを理論的に考察しても、又事實の經過についてあてはめて考慮してみても、事は余りにも簡單であるやうに思ふ。世人は中々にそれが理解されないやうである。それは彼等の無誠意と無理想に伴ふ怠慢にあることを指摘して置く。謂はば彼等をして其日暮しの短見者流

たらしむるものがあるからである。その原因は誰でも、彼等自身に研究心が起つてゐないことである。又更に一つは古い時代その儘の指導方法を堅守してゐて、少しも時代の進化に一步先んずる位の理解のなない處にあるのである。それが多少分らんでもあるまいが、如何にも古式のものに執着力が強くて、一步を出つることが容易でない。新しいものを執り入れる雅量に乏しいためでもあることは否めない。

更に又一つは人性を唯物的に見定めてゐるがために、これ以上に考へたところが、なる様にしかならぬものと、至極無雜作に獨斷してゐるものがあるためであるやうである。或は又その反對に人性を余り唯心的に見ることが先入手となつてゐて、靈肉合致するは、これ人性なりとみる見方をしてゐる二宮先生の報徳教が分つてゐて分らぬやうな不徹底さにもある。道徳的に經濟的に今の生活本質を捕へた上に、生れてゐる報徳教を奉じながらも、その先入手があるために所謂宗教心が邪魔をして經濟行爲に充分突進することの出来ないものがある様である。

彼等は決して共存共榮の美名の下に陰れて、隱微故息に流れ、又共存共榮の美名の下に共同破壊を企てる様な人非人では無いと信ずるものだが、しかし、事實は最大の雄辯だと言ふ金言通りに、多くの産業組合中にも、又報徳社中にも共存共榮のモットーと相反する事實をみることの少なからざるを甚だ遺憾とする。

茲に於てか凡ゆる階級を救ふべき使命を有つ産業組合の健實なる發達を圖り、共存共榮の大目的を實現せんために、從來の唯物主義に加ふるに唯心主義を加味して、吾等の古くから唱道する報徳産業組合として出直すことこそ、所期の大目的を完成するものと信じて疑はない。更に報徳に就ては、二宮先生の報徳道にも又小乘道と大乘道の兩道兩面の示されてゐることを深く考慮して、共同結社する精神を達成し、報徳の道を遂行する覺悟を急務とするものである。

二宮先生の報徳結社が創始されて彼是八十余年になる。此の短からざる歲月を經過して報徳社はどの位成長してゐるであらうか、その間幾多の變遷があつたとしても、兎に角、本社支社町村社を通じて幾千の報徳社はある。假令、貧弱ながらも社そのものとして表簿の上では、それ相應の資産をもち又社員をもつてはゐるものの、結社の大目的の報徳事業は何れほどの成績を擧げてゐるかを甚だ愁ふものである。即ち社員個々の報徳心の成長は果して八十年間人生約三代に涉つての、見るべき又當然なさるべき成長が出来たかどうかである。報徳道に於ても一般の宗教に於て云ふやうに用語は變つてゐても財は末なり徳は基なりと教られ、心田の開發を最も大切だとされてゐるが、德行さへ積めば物質的にも恵まれてよい筈である。然るに事實は何れに參りても殆んど報徳教を知らぬ社外の人々の生活と彼等の内容生活ともに殆んど何の軒

軒も無いやうである。それは社員中一人や二人謂はば白米の中の荒くらしいに富み榮えてゐる家はないでもない。それは甚だ遺憾な事ではあるが、眞の報徳社員なるものは唯一の松山報徳社の以外には見られない様な状態であるやうに思はれる。現に創立以來八十間年の歴史を有つ遠州の牛岡報徳社の沿革史及び現量鏡（事業報告書）と、此社の所在地の倉真村役場が有つ村民貧富の状態を統計書と對照して調べてみても、社そのものは、無より有を生じ、相當の設備や資産を持つてゐることは明らかではあるが、社員個々の實力資産等の状態に於ては、前に云ふ吾等の杞憂するそのものが目につく。それは共榮向上の實が極めて微弱なものであつて、世運の進歩に添ふ發達のあるか無きを思はしむるものがあるからである。又更に創立以降四十年の歴史をもち、全國町村社の雄なりと名聲を上げたことのある岐阜縣××村字××報徳社の業績にみても一時は全盛を極めた時代も無いでは無かつたが、最近に至りて、一つの不祥事が暴露し一時に四十余名の社員を失つてゐる。某社員は祖先傳來の資産を喪失してゐるやうな事實もある。かくの如きは單に××村報徳社のみが出来ごととは言へない状態そのものが多々益々ある様である。成る程、牛岡報徳社の産みの親である家で、又大日本報徳社の創始者であつて、子孫四代に亘りてその社長を出した岡田家の如きは、その家庭より御兄弟二人が揃つて大臣の榮職に就かるるほどの寔に立派なる、社員中のダイヤモンドを出してゐるが、尙其の他にも岡

田家に續くやうな名譽なり、資産を増大した家は無いではないが、これを本社地方社とその社員數から云ふと、あたかも曉天の星にもあたるほど貧弱なものである。その貧弱さは過去の報徳教の普及が小乗的であつて、社會的の即ち大乘的でなかつた處に原因があるのである。

苟くも財は末なり、徳は基なりと標語して立つ、心田開發の報徳團體の業績が例故にかくの如く貧弱であるかを調査してみると、社員が各自個々を修め守るためには、或は世間から報徳社の人は頑迷だ、古陋だ、消極一方の貯金屋だと、批判されるまでの世評を受ける位いが關の山であつたからだ。それはイソツプの譬論にもあるサザエの話の數であつて甚だ賢明でない。それでは折角二宮先生の教旨を守りて報徳結社をする目的にも精神にも合致しない愚さであつて、吾人はそれを小乗的報徳生活であると云ふのである。それはどういふ理由かと云ふと、二宮先生の教旨を深く味察すると、報徳道を會行せんとするものは、飽までも大乘的でなければならぬことが明らかに教示されてゐるからである。かく吾人は考へるものである。

その教旨を證明するものは、夜話三の卷第十二章に「一家の推持法を論ず家臺船の譬と」云ふ教訓が、その大乘的報徳道即ち共同團結たることを明かに教へてゐるから爰に引照する。翁曰、家屋の事を、俗に家船又家臺船と云、面白き俗言なり、家をば實に船と心得べし、是を船とする時は、主人は船頭なり、一家の者は皆乗合ひなり、世の中は大海なり、然る時は、

此家船に事あるも、又世の大海に事あるも、皆通れざる事にして船頭は勿論、此船の乗合たる者は一心協力此家船を維持すべし、扱此家船を維持するには、楫の取様と、船に穴のあかぬ様にするの二つが専務なり、此二ツによく氣を付れば、家船の維持疑ひなし、然るに楫の取様に、心を用ひず、家船の底に穴があきても、是を寔んともせず、船頭は働かずして、酒を呑み妻は遊藝を樂しみ、俸は基將棋に耽り、二男は詩を作り、歌を讀みて歲月を送れば、終に家船をして沈没するに至らしむ、歎息の至ならずや、從令大穴ならずとも、少しにても穴があくれば、速に乗合一同力を盡して、穴を塞ぎ、朝夕ともに穴のあかさる様に、能々心を用ゆべし、是此乗合の者の肝要の事なり、然るに既に、大穴明きて猶、是を塞んともせず各々己が心の儘に安閑と暮して居て、誰か塞いで呉れそふな物だと、待つて居て濟べきや、助け船のみを頼みにして居て濟むべきや、船中の乗合ひ一同、身命をも抛て働かずば、あるべからざる時なるをや。

第十七章 二宮主義の生命は協同經濟の構機にある

前項に引例した家臺船の譬に盛られたる教訓は、二宮教の生命とも云ふものであつて、協同

の大切なことを教へてゐる。後文に詳しく書くが協力経済機構の要務も此の教訓から學ばれる。即ち大乘的の教訓であるのである。これは多くの宗教者や倫理學者の等閑に付して、手着けてゐない處であつて、二宮翁夜話五卷二百八十四章中の王座を占むる報徳結社の心髓であるのである。然るに多くの報徳教の指導者も又社員も、小乗的の個人的修養道を説き又守らんとする氣持はあつても、その個人的信仰が容易に實踐されないのは、折角力説されてゐる處の家臺船の譬話に、含んでゐる大乘的の教旨が理解されてゐないために、共力助成する生活が報徳社を口にする人々に出來てゐないからである。かるが故に、個人的に善い教だと、信仰してゐても、誰も信條が保てず、謂んや共同結社しても、各員が願ふやうに共榮向上の成績が擧らないのである。或は場所によつては其の反對に、岐阜縣下の安弘見報徳社の不始末のやうに、結盟社員の家を潰さなければ社業の整理が着かない破目に陥つて了ふ、その爲めに世間の物笑の種となり、折角、長年のあいだ互に信頼仕合つて來た仕事に仲間割れがして、社業が中絶した様な例は他にも尠くないことを甚だ遺憾とする。又そうした不祥事の突發せんことを恐れて、無暗と警戒をするために、社業は一向學がらず、成績にみるものが無く、世間から見ると報徳社とは、信用組合よりは融通の利かぬものとなり、單に世間並の勤儉貯金位にしかみられないやうなものも數多くあることは、斯道のために考へて誠になげかけしき次第である。これと云ふ

のも、二宮先生が幾多の宗派や宗教者の偏見の成すなき状態や又は學者の空論の甚だしい態を憂ひて、先生一流の爛眼と常識に照らして編み出されたる報徳教の要旨が、靈肉合致のものであつて、個人的にみたるそれを擴大したるものが、即ち個人と個人の協同生活であるとする深い教旨に到達するまでに研究が届かず、財は末なり、徳は元なり、唯至誠と實行にあり等と高く止つて、現在の経済機構や生活状態に對する研究を怠つてゐる處に缺けた處があるからであると斷しても、敢て差支あるまいとすることを甚だ遺憾とする。

論じて爰に至ると、更に二宮先生の卓見と偉大さを發見するものがある。今や自由主義經濟即ち資本主義經濟が行き詰つて、漸く統制經濟の唱道を聞くとき、希待される統制經濟機構にも、尙幾多の不備の伴ふことを豫感する吾等は、二宮先生の創案されたる報徳結社を中心とする經濟行爲はとりも直さず、統制經濟の缺陷を補正して、尙餘りある最も優れたる機構であつたと信ずる。彼の松山報徳社が驚嘆すべき業績を擧げたのは、先生の活躍に成る協力和合を主とする經濟機構の組織をもつて、充分に運用した處にあることを知るべきである。夫を知るにつけても、大正十二年各社の大合同の行はるゝ前の遠江報徳社が百萬圓からの大資本を擁してゐながら、一小松山報徳社の成したほどの業績を擧げてゐないことは、協力經濟機構の運用に盲目であつたのか、又怠慢であつたのだと言へる。

今や資本主義經濟の壓迫に堪へずして、行惱んでゐる農村は、協力經濟機構を準備する徳報社か、又は産業組合に寄りかゝるかしないかと救はるゝ道も生る道も無いのである。報徳精神の研究はかゝる先生の卓見を見落して通るやうな迂濶であつてはならぬ。それは過去に於て松山報徳社以外の報徳社の陥つてゐる積弊であるからである。且又、更らに近時新らたに勃興せんとする報徳思想の普及と結社の結ばれた氣運は熟してゐる際であることを想見する吾人は特に斯道のために爰に僅記して時人を訓めてをく。

第十八章 報徳社及産業組合の將來を思ふ

爰に一寸斷つて置く必要のあることは、同じ文字によつて報徳會又は報徳社と言つても、報徳の表札を掲げる流れが東と西に二つあつて、西に屬するものは京都伏見桃山に本部を置くもので此方は確か教育勸語の聖旨を實踐する云ふことを表はするものであつて、東に本社を置く二宮尊徳先生の思想から生れてゐる報徳主義とは、少し趣きと出發に異つた處がある。むしろ報徳の名稱を附することのふさはしからざるを思ふ。吾等が云ふ報徳道を唱へるのは天龍川の東、静岡縣掛川町に存在する大日本報徳社を中心とする二宮先生直傳の報徳社であることを斷つてをく。抑も報徳諸社の由來する處を調べてみると天保年間に於て創始されたもので、彼是

の古き社に至つては百二十年からの歴史をもつものがある。然し、最も盛んになつたのは、先生の歿後、多くの弟子達が、それを故郷に歸つてその土地を中心にして起つたものである。今ではその數千社前後を數ふる報徳社中吾人の活目してみても眞に報徳社の存在を認むるものは前に記した唯一の富豪であつた爲に、結社、傳道と普及とに餘程の便があつたことが數へられる。駿河及相模地方のものは、小田原館内に領主の權威の下に行はれたものが傍人の噂に登るほど成績が顯著であつたのと、夜話の著者の兄弟が富豪であり人格者であつた、僅か八十七戸をもつて團結する杉山報徳社のあることに過ぎないことは、如何にも物淋しさを感ぜざる譯には行かない。先生の時代に於ては、あれまでに盛大を極めた報徳の仕法が、先生の歿後、更に數に於ては二百三百五百から千にまで數へうるに至つた結社が、その内容實質成績にみるべきものが何故にないかと云ふことを、その沿革に溯つて尋ねてみると、先生時代の報徳の仕法は、概して領主の大名の絶對權威の下に爲されたものであるが故に、その成績の顯著であつた事、及び遠州に於ける報徳社の多いと云ふことは、その地方の富豪中の人格者が中心であつたこと、現在社長一木氏の嚴父岡田良一郎氏が郡長であつたことによつても、爲政者の被護がなければ、民間獨立の事業としては容易に業績の擧るものでないと云ふことがうなづかれる。更に杉山報徳社の偉大な業績のあがつた由來を尋ねると、杉山部落八十七戸を壓して尙余祐の

あるやうな人格者で富豪であつた片平家代々の如き、中心人物を得てゐることが分る。尙進んで廣く過去の報徳社の盛衰について今爰で詳しく評論し又は検討する紙面がないから略しておくが、今日以後の報徳社は、國家の權威と大いなる被護の與へられない限りは、國家なり國民の希待するやうな業績は到底擧るべきもないと斷定するものである。或は斯界に従事する諸君に對しては甚だ禮を失する言葉に當るかも知れないけれども、過去を振り返つてみると幸ひにも岡田家と云ふ四代承應の報徳熱誠者があつて、今日の大日本報徳社は成長して來たものであることを想ふとき、現社長一木喜徳郎氏の引退後の中心が將來何れに移らうとも、岡田佐平治翁以來の二宮先生直傳の報徳精神は、或は餘程割引されるものなきを憂ふるものは敢て吾人のみではあるまい。

吾人は曾て、二宮先生の高弟富田高慶翁によつて、明治の始め創始されたる北海道豊頃村の興復社こそ、正統報徳社として、定めて理想的報徳卿を建設するものと、大いに希待をかけたことがある。

然るに、大正十二年北海道地方巡回の砌り、其偉績を祝ふことを楽しんで豊頃村を訪ねたものだが、既に興復社は解散してゐて、残務整理のために富田翁の嗣子たる方が福島縣相馬より下りて、之の興復社の事務所に滞在されてゐることを知り、宿を同じにして、社業の経過と成

績を聴聞し、甚だ失望したことがある。然も此社は北海道移住開拓に際して、省内省より一萬五千圓の御下賜金を給はり、又道廳よりは格別詮議の下に廣大なる原始林も下附されて、一般移住民よりは特に選ばれた過當の優遇を受けて移住開拓に従事したものであるが、その後の成績は一般移住民地と比べて、殆んど甲乙も無く、平凡な村であつて、然かも甚だ遺憾なことは最初に興復社員として、移住したる移民百五十戸の内、今では、その大半は居住者が入變つてゐるが如き悲しさである。吾等は多年の希待を裏切られた感があつた。而しそれは、興復社の業績を調ぶることによつて、爰にも又、先生の卓見創始になる最も大切な協力經濟の原理が理解されてゐない、彼の静岡縣下の杉山報徳社の業績に及ばざるものゝあることを發見した。曾て、大正年間、報徳社を類別して遠江報徳社の業態を調べ、社會政策的なりと斷じ、又復興社こそ純正報徳道を行ふものなりと推想したことは、吾人の見の甚だ不覺であつたことを甚だ恥るものがある。

爰に於いて吾等は、報徳教及報徳社の大きい使命を果さんがために、此等の杞憂を一掃すると共に、非常時日本の國家民生に貢獻するに足る力ある一大革新を圖ることの急務なるを思ひ幸ひ此度の八十年記念祭を絶好の剋期として、更らに新らしい生命を内容とする報徳教及報徳社の時代化が成されなければならぬと思ふ。甚だ輕忽のそしりは免かれないかも知れないが、

吾等の希待する報徳教の時代化は、先づ神道一派の國教として出直し、凡ゆる宗教を超越した國教として、國民は必らず報徳教會員たらしむることを強調し、國民の精神界を支配する内容をもつまでに國家の權威の下に大成して、伊勢の神宮司廳の直轄に移るべきことを衷心から願ふて止まないものである。そして町村神社の神職は、直ちに國教報徳教の講師であつて、町村報徳社のために指導大成すべく毎月一日と十五日には力ある神々からの道を基調とする報徳精神の修養に資する精神講話を試みることに、あたかもキリスト教國が教儀作法を敢行するが如くにあるべきものと思ふ。斯くありてこそ、國民思想の統一も、又指導もなされ得るものと信ずる。現時の我國の如き國民精神の指導を圖る機構の不備なる國家は、文明國として唯日本あるのみではあるまいか。このことは爲政者の局に立つ者も、又國民の、況んや報徳社に關係を有つ人々の深く考ふべきことで、今日こそ正に絶好の時期であるのである。

更らに報徳社に就ては、前にも述べてをいた様に、從來の産業組合の智識を執り入れて、地方金融、生産、生活のための協力經濟機關として時代化すべき要がある。そして産業組合と、兩々その業績を競はしむるもよい。

更に産業組合に對しては、吾等は事實上、數十年間に涉りて其盛衰を見聞することにより、その將來性の確實を認むるもので、共存共榮の組合のモットーこそは吾等の大いに共鳴すると

ころである。されば産業組合至上主義を奉ずることに於いては今も昔も變らない。かゝるが故に、産業組合は又、直ちに報徳社の有つ道德方面の信條をとり入れて、經濟と道德の深い連鎖の上にのみ共存共榮のモットは實顯さるべきものであることを信ずるものである。それはなぜかとなれば、今、全國一萬五千の組合の中、睡眠状態にあると盛んに活動事業を運営してゐる組合の區別なく事業報告書を手に執つてその資産欄に眼を通すならば、殆んど何れの組合でも非事業用の土地財産が相當記入されてゐないものは無い。このことは謂ゆる鎗の足喰ひをやつてゐるものであつて、組合の看板とする共存共榮のモットを裏切つてゐる。これはひとり筆者のみの見解ではあるまい。隨時發表される組合事業上の不祥事の多くは、今の組合が道德方面の仕事に手を着けてゐない爲めに起るものであつて、かゝる憂ひを除くにはどうしても組合に道德化を圖ることが急務である。更に引例するが、静岡縣下の一産業組合が、その地の小銀行の有つ不良貸付をそのままに繼承して、組合が銀行と合併してゐるが如き最も危険なる道を執らざるに至つた内部の事情などを調べてゐる筆者は、産業組合も又、今日の行方では憂慮に堪えないものがある。組合がかゝる窮地に陥ることも、防ぐ方法としては前にも云ふたやうに報徳社の道德方面を執り入れた組合の道德化を圖るしか之を救ふ道の無きことを思ふ。斯くありてこそ、組合は相互扶助の團體として、又共存共榮のモットをして、十分に成就し得べきこと

を信ずる。吾等はおかくて報徳社の産業組合化、産業組合の報徳社化を、官民ともに今日直ちに熟慮断行すべき要あることを主張する。

第十九章 農村の不安を救ふのは報徳教及報徳社の時代化

農村が現在そのまゝの無理想無定見のまゝで経済的更生が出来るとしたら、それは大きな錯覚であつて、所詮永遠の安堵を得ることは愚か、祖先傳來の田畑山林も或は有ち切れないものと断定することが出来る。これは當然であつて、又事實が雄辨に物語るから仕方がない。論より證據と云ふことがある。先づ諸君の足下をみるがよい。長らく報徳結社をやつてゐて、どれだけ先々の生活上の安帯保證が造成されたであらうか。結社以來二十年三十年、或は四十年五十年の歴史と沿革を有つ報徳社にして、果して經營難を苦にしない農家があるであらうかもしあるとすれば甚だ疑はしく感ずる。又更らに産業組合に加入してゐる農家にしても、どれだけ組合を信頼してゐるものがあるであらうか。幾ら嫁いでも働いても、所詮農家が今日以上に生活上の安心が出来ないとすれば、明日の農村はどうなり行くことであらうか。斯く考ると甚だ寒心すべきものがある。これは非常なる低能者にならざる限りは、百姓とはかうも恵まれない業務であるかと諦めることが出来まいと思ふ。もしその諦めが出来兼ねるものとすれば、早

速歟を捨て、他に轉業するより仕方があるまい。と云つて、他に轉業するとしても、資本がなく、腕に覺の無いのでは樂に飯の喰つて行ける筈もない。迂濶に轉業することも出来ない。かくてどうにも斯うにもならないから、何の希望も有てないけれども仕方なしに鋤を握つてゐるのだとすれば、この位いぢめなことは無い。これを過去にみるに、何時も農家は生産的に農事の改良が出来れば出来るほど、農家の生活は詰るのみであることが、理論でなしに繰返されて来たことが農村農家のまさしくしい事實であるからである。明治二十二年頃、石六七圓で米を賣つた百姓は、昨今石三十圓の米を賣つて尙且つ引合す、農家全體は石六圓の米を賣つたときよりも借金の増加は加速的に増加して、その頃一戸當りの負債は僅かに四五圓に過ぎなかつたものが今では三四百倍も殖え、千圓以上だと云はれてゐる。このことは、どうしても理屈に合はぬことは眼前の事實である。されば、これを何うしたらよいかと云ふことが誰も彼も頭を痛めてゐる問題であつて、かの農村工業化がよいと言ふ話を聞けば、何處でも一寸手を出したくなるが、手を出して果して安心の出来るほど儲かつて行くであらうか、既に養蠶に見切をつけて桑を抜いて野菜を栽培したら、却て繭の値は出たが、反對に野菜輸出版路が無いと云つたやうなヘマがあり、或は又、養鶏をやり豚を飼ひ、兎を飼つてゐるが、飼料が高くて引合ぬと云ふ事實談を聞かされる。あゝ人世百姓と云ふのはこうした不安の絶えないものであらうかと

も考へて、寺参りを始めても一向安心が出来ない。そこで遂に自暴自棄に陥り、其日其日の享樂生活に惰して了ひ、斯くて農民が無定見無理想に終始しつゝあるのではあるまいか、若しそうであるとしたならば、農村と云ふよりも百姓と云ふよりも、國家民族の將來は一體どうなるかと云ふ、甚だ寒心に堪へないものが湧いて来るのである。これだけの疑問不安を抱かないでゐる人が、もしあるとすれば、その當座に於ては、その人は確かに幸福なる人であるかも知れないが、その人その家の將來には少しも光明がないのである。光明の無い農村は暗黒である稼でも幾ら働いても足りないから、他の職業の方が何となく儲かつて、樂さうに見へるやうでは、眞に安心して農村の生活がなされるものでない。而しそれは今迄のまゝの農村の組織なり經營なりをそのまゝにした、策も手段も無いものとしての悲觀であつて、それは甚だ輕率であつて、又思慮の足らない次第である。それは農業といへども時代と共に移り、變つて行くもので、あることを知らない愚なさであると言はなければなるまい。吾等は明治の末葉に於て、既に必らず農村に今日の如き難關苦境の到來すべき運命にあることを豫見することが出来たので、時代に處する農村策として、既に理想の村による農村更生策を發表してゐる。又農家のためには、過度期の農家經營は斯くなさざる可らざるものとして『理想の農家』を出版してゐる。けれども微力なる吾等の力は存外に反響がなかつた。そして遂に大勢を動かして、時代に處する

策を施すべきすべもなかつた。かくて農村農家には遂に來るべきものは來たつた。最近になつて官民共に足下に鳥の立つ様に驚いた結果、彼等はいろ／＼と更生策を講じてゐるやうであるが、眞に農村のために考へてみて、成る程、これなれば或は農村の更生も出来るであらうと思はずものは殆んどない。吾等が二十余年も前に發表してゐるものと比較して、何れも時務を識らぬ迂愚の愚策のみであることを、甚だ遺憾とするものである。何故にかく斷ずるか云ふに、假りにそれ等を実行してみても、直ぐに二年か三年で、又遣り返しをなさなければならぬ様な、不安と無駄が、伴なう様な浮薄偏處に捉らはれたるものばかりであるからである假令ば、過去に於いて、結社二十年、三十年、四十年にして、又、産業組合を組織して十年二十年三十年にしても、一向、理想の農村も農家も實顯しないのを見ても分るやうに、又、最近行はるる農村經濟計劃なるものを見ても以前行はれて成功しなかつた村是の文書が燒直しされたに過ぎない小策のみであるからである。事實は甚だ明かである。試みに近在の謂ゆる更生農村の實狀を検討してみるがよい。果して更生の實を擧げつゝあるか々分る。サイの河原の石積のやうに積んだ傍らからクヅれて行くはかなさではないか。

それは吾等の農村策に示してある貧富合しての相互扶助により、ある一定の期限には必らず到着すべき焦點を置かないで、丸で雲を掴かまんとする様な、空莫杜選なる方法であるからで

あることを知らぬばならぬ。吾人は曾て明星村の復興から理想郷化までの過程を、睡生夢生の時代と、暗黒時代と、建設時代の三段に分けて村の改良策を記述した。それは、無氣力なる農村の、極めて非科學的なる農業經營が遂に行詰り、旅の貧しい報徳教の傳道者が來ることによつて、二宮流の新更生策が行はれ、美事適中して、貧窮なる明星村の挽回を圖るに極めて科學的なる道徳的經濟的の施設と經營策を協力一致して行ひ、遂に所期の目的を完成して、理想の農村を建設するまでの仕組が目的小説として具體的に説明したのである。そこには既に「報徳教及報徳社の時代化」が實現してあるのである。

又、八十七回の『三才報徳現量鏡』を發行して遠州の最も古い歴史を有つ倉真村牛岡報徳社の沿革に示す、『報徳先生の教により、人々の身代を取直し、貧窮人を富ましめ、村柄の興復をなすにあり』とする理想の村を實現した。

吾等は實に、吾等の尊崇やまない尊徳二宮大先生の八十年祭記念日を迎へるにあたりて、尊崇の念に堪へず、爰に此一文を叙して尊徳先生の英靈に供へ、併せて四方の諸賢の高覽に供するの機會を得たることを甚だ光榮とする。

農 業 日 本

此の雜誌一冊で日本の農村は救はれる!!
これぞ農家日常の實用雜誌!!!

雜誌「農業日本」が生れた!これこそ眞に日本農村の窮狀を救ふるものだ。農村の更生を求むるもの、農家の繁榮を望むもの、郷土の指導者たらんとするものは、何を措いても先づ雜誌「農業日本」を讀め!!!

毎月一回一日發行 每號菊版百五十頁
定價一部十五錢(送料)半ヶ年九十六錢
一ヶ年一圓六十錢
讀んでスグ役立つ 農業知識満載!

東京市神田區 日本農村協會 振替 東京 四七九六番

昭和十年十月十五日 印刷
昭和十年十月十八日 發行

【定價十錢】

著者 東京市外千歲村烏山 石田傳吉

發行兼印刷者 東京市外千歲村烏山 石田銀

發行所 東京市外千歲村烏山 地方改良協會

東京市神田區鍛冶町三ノ八

發賣所 日本農村協會
振替東京六九七四五番

終